

押尾古屋敷

矢 尻 遺跡発掘調査報告書
坪 内

平成9年3月

茨城県真壁郡明野町教育委員会

明野町埋蔵文化財発掘調査会

押尾古屋敷

矢 尻 遺跡発掘調査報告書
坪 内

平成9年3月

茨城県真壁郡明野町教育委員会
明野町埋蔵文化財発掘調査会

序

明野町は、町内各地から貝塚・古墳・集落跡が発見され、埋蔵文化財の包蔵地が151箇所を数えて古代から開けていた地として知られています。

このたび、茨城県下館土地改良事務所の観音川流域県営ほ場整備事業に伴う排水路工事のため明野町大字宮山・押尾地内に所在いたします「矢尻遺跡」、「坪内遺跡」、「押尾古屋敷遺跡」の一部を記録保存のために発掘調査を実施いたしました。

3つの遺跡は、奈良・平安時代から江戸時代に営まれていた遺跡で集落跡が全部で20箇所発見され、土師器・須恵器が多量に出土されました。しかし、今回の調査は幅員2.4mの排水路部分であったため遺跡の全貌は確認できず、発掘調査地以外の遺跡は現状保存という形をとりました。

明野町に存在する古代歴史のロマンとも言える重要な埋蔵文化財を保存し、次世代に引き継いでいくことが、私どもに課せられた責務と考えます。

この調査の成果であります本報告書が、郷土の歴史の理解を深める研究資料として活用されますことを切望いたします。

なお、今回の発掘調査にあたりましては、関係機関の皆様方に御高配を賜りましたこと厚く御礼申し上げ発刊のあいさつといたします。

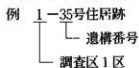
平成9年3月

明野町教育委員会

教育長 黒 須 勉

例 言

1. 本書は、茨城県真壁郡明野町大字押尾及び大字宮山地区で計画された、観音川流域県営ほ場整備事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業地内に所在する押尾占屋敷遺跡（大字押尾地内）、矢尻遺跡（大字宮山地内）、坪内遺跡（大字宮山地内）の3遺跡を行った。
3. 埋蔵文化財発掘調査は、明野町教育委員会内に設けられた「明野町埋蔵文化財発掘調査会」が主体となり、明野町埋蔵文化財発掘調査会と茨城県下館土地改良事務所との委託契約に基づいて、明野町埋蔵文化財発掘調査会が実施した。
4. 埋蔵文化財発掘調査は、平成8年（1996）1月29日から3月29日まで実施した。
5. 発掘調査に係わる担当者、渡邊久生が行った。
6. 本書に係わる遺物整理、執筆は渡邊が担当して行った。
7. 発掘調査の出土遺物は、明野町教育委員会に一括して保管している。
8. 本報告書に記載の遺構番号は、発掘調査時の番号を使用した。遺構の重複は遺構番号の後にアルファベットを付した。



目 次

序 例 言	
第一章 発掘調査に至る経緯	1
第二章 発掘調査の経過と方法	2
I 発掘調査の経過	2
II 発掘調査の方法	2
第三章 遺跡の地理的環境	3
第四章 押尾古屋敷遺跡の概要	5
第五章 遺構と遺物	9
I 住居跡と出土遺物	9
1. 1-1号住居跡と出土遺物	9
2. 1-27号住居跡と出土遺物	10
3. 1-35号住居跡と出土遺物	12
(1) 1-35A号住居跡と出土遺物	12
(2) 1-35B号住居跡と出土遺物	12
(3) 1-35C号住居跡と出土遺物	14
(4) 1-35D号住居跡と出土遺物	14
4. 1-37号住居跡と出土遺物	15
5. 1-38号住居跡と出土遺物	16
6. 2-3号住居跡と出土遺物	17
7. 3-5号住居跡と出土遺物	17
II 井戸と出土遺物	18
III 土坑と出土遺物	20
IV 堀と出土遺物	21
V 溝と出土遺物	24
VI その他の遺物	28
第六章 矢尻遺跡の概要	29
第七章 遺構と遺物	32
I 住居跡と出土遺物	32
1. 1-10号住居跡と出土遺物	32
(1) 1-10A号住居跡と出土遺物	32

(2) 1-10B号住居跡と出土遺物	33
II 井戸と出土遺物	34
1. 1-6号井戸と出土遺物	34
2. 2-14号井戸と出土遺物	34
(1) 2-14A号井戸と出土遺物	34
(2) 2-14B号井戸と出土遺物	34
3. 2-15号井戸と出土遺物	34
III 土坑と出土遺物	34
1. 2-12号土坑	34
2. 2-24号土坑	35
3. 1-8, 9号土坑	36
IV 溝と出土遺物	36
V その他の遺物	36
第八章 坪内遺跡の概要	37
第九章 遺構と遺物	40
I 住居跡と出土遺物	40
1. 1-7号住居跡と出土遺物	40
2. 1-10号住居跡と出土遺物	40
3. 1-11号住居跡と出土遺物	42
4. 1-19号住居跡と出土遺物	44
5. 1-21号住居跡と出土遺物	44
6. 2-30号住居跡と出土遺物	45
(1) 2-30A号住居跡と出土遺物	45
(2) 2-30B号住居跡と出土遺物	45
7. 2-36号住居跡と出土遺物	46
II 井戸と出土遺物	47
1. 1-12号井戸	47
2. 2-39号井戸	47
III 土坑と出土遺物	47
IV 溝と出土遺物	49
1. 1-1号溝	49
2. 1-25号溝	49
3. 2-29号溝	49
4. その他の溝	50
第十章 まとめ	51

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	4	第29図	矢尻遺跡	30
第2図	押尾古屋敷遺跡	6	第30図	矢尻遺跡全体図	31
第3図	押尾古屋敷遺跡1区全体図	7	第31図	1-10A, 1-10B住居跡	32
第4図	押尾古屋敷遺跡2, 3区全体図	8	第32図	1-10出土遺物	33
第5図	1-1住居跡	9	第33図	1-10Bカマド	33
第6図	1-1カマド	9	第34図	2-14A出土遺物	34
第7図	1-26溝, 1-27住居跡	10	第35図	2-14号井戸, 1-1, 3, 2-12, 18-20, 24号土坑	35
第8図	1-35住居跡	11	第36図	1-8, 9号土坑	36
第9図	青白色粘土層	12	第37図	その他の遺物	36
第10図	1-35Bカマド	13	第38図	坪内遺跡	38
第11図	1-35B出土遺物	13	第39図	坪内遺跡全体図	39
第12図	1-37号住居跡	15	第40図	1-7, 10号住居跡	40
第13図	1-38住居跡	16	第41図	1-10カマド	41
第14図	2-3号住居跡	17	第42図	1-10出土遺物	41
第15図	2-3出土遺物	17	第43図	1-11号住居跡	42
第16図	3-5号住居跡	18	第44図	1-11カマド	43
第17図	3-5カマド	18	第45図	1-11出土遺物	43
第18図	1-8, 12, 21, 28井戸	19	第46図	1-19, 21号住居跡	44
第19図	1-2, 9, 11, 30-34, 2-5, 3-1号土坑	20	第47図	1-19出土遺物	44
第20図	1-17堀	22	第48図	2-30号住居跡	45
第21図	1-17土層	23	第49図	2-30出土遺物	46
第22図	1-17出土遺物	24	第50図	2-36号住居跡	46
第23図	1-17出土遺物	24	第51図	1-12, 2-39井戸, 1-5, 6, 2-31, 38土坑	48
第24図	1-5, 6号溝	25	第52図	1-25溝	49
第25図	1-13井戸, 1-14溝	26	第53図	1-1溝	50
第26図	1-24, 25溝	26	第54図	2-29溝	50
第27図	3-3, 6溝	27			
第28図	その他の遺物	28			

第一章 発掘調査に至る経緯

押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業に伴い実施されたものである。観音川流域県営ほ場整備事業は、平成7年度から数年にまたがる規模の大きな事業である。観音川流域県営ほ場整備事業区域内には、6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が知られている。今回の発掘調査対象となった埋蔵文化財包蔵地は、押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の3ヶ所である。

押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の所在確認及び遺跡の性格や規模等を把握するために、本調査に先だって確認調査を実施した。確認調査は耕作地の使用されていない時期を選び、平成7年10月12日～20日までの9日間実施された。確認調査の成果は、平成7年11月に確認調査報告書を作成し、関係各機関に提出した。確認調査の成果は概ね次の通りである。但し遺構の調査は実施しておらず、遺構数等は推定された数字である。

押尾古屋敷遺跡 12ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施し、住居跡約20ヶ所（重複を含む）、土坑約30ヶ所、溝約15ヶ所等の所在を推測した。遺跡の時代は、奈良・平安時代から江戸時代に至るであろうと推定され、遺跡の規模は大きいと思われる。出土遺物は、土師器、須恵器が主であるが、内耳のホウロク等も見られる。出土量はやや多い。

矢尻遺跡 15ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施した。住居跡約10ヶ所（重複を含む）、土坑約15ヶ所、溝3ヶ所の所在を推定した。遺跡の時代は奈良・平安時代から江戸時代に営まれていた遺跡であると推定される。遺物は土師器、須恵器が出土しているが、出土量は少ない。

坪内遺跡 坪内遺跡は遺跡の東縁部がほ場整備事業区域内に含まれる。5ヶ所のトレンチを設定して確認調査を実施した。住居跡約15ヶ所（重複を含む）、土坑約20ヶ所、溝3ヶ所の遺構が推定された。遺跡の時代は奈良・平安時代の集落跡であると推定され、遺跡は西方に広がると考えられる。遺物は土師器が主であり、出土量はやや多い。

3ヶ所の遺跡の概要は、奈良・平安時代の集落跡を主体とし鎌倉時代或いは江戸時代に至る遺跡であることが推察された。

確認調査の成果を踏まえて、関係各機関が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。協議は、茨城県教育庁文化課の指導のもと、観音川流域県営ほ場整備事業の主体者である茨城県下館土地改良事務所、明野町産業課、そして明野町教育委員会の関係各機関で行われた。協議は、埋蔵文化財の保存方法と、ほ場整備事業工事の施工方法についての協議に多くの時間を割いて行われた。協議に基づいて埋蔵文化財発掘調査の範囲、発掘調査の時期及び実施の方法等が確定された。観音川流域ほ場整備事業区域は、全体の高低差が1m 足らずの比較的平坦な地形であることから、土の移動を極力抑えること等工事の施工方法を考慮することによって、埋蔵文化財への影響を極力少なくすることが可能であると考えられた。またはほ場整備事業区域内の表土は比較的深度平均して約50cmを測る。発掘調査範囲は、地表から深く掘削する水路用地部分で、かつ埋蔵文化財が存在する範囲となった。

発掘調査は明野町教育委員会が調査主体者となり、観音川流域県営ほ場整備事業関係各機関及び関係者による「明野町埋蔵文化財発掘調査会」を設立して発掘調査を実施することとなった。発掘調査は関係各位の御協力と御理解を得て、平成8年1月29日から3月29日まで実施された。

第二章 発掘調査の経過と方法

I 発掘調査の経過

押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の発掘調査は、平成8年1月29日から3月29日に至る2ヶ月間実施された。

1月29日 明野町産業課及び明野町教育委員会の立ち会いのもと、調査区域の設定作業を行った。引き続きパワーショベルを使用して、押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡及び坪内遺跡の表土掘削作業に着手する。併せて、確認調査時のトレンチの埋め戻し作業を行った。

2月1日 表土掘削及び確認調査時のトレンチ埋め戻しを完了し、本日から遺構調査を開始する。作業員の方々は今回が初めての発掘調査であるために、発掘調査に先だって調査の方法等の説明を行った。発掘調査は押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡、坪内遺跡の順に着手することとした。

押尾古屋敷遺跡の調査区域は、南と北に離れて位置しており、また南調査区も道路によって2分されていることから、南調査区の東部を1区、西部を2区、北調査区を3区と呼称した。

天候の影響を受けたり、予想を上回る規模の大きな溝等の遺構が検出され、予定を上回る時間を必要とした。押尾古屋敷遺跡は、住居跡9ヶ所、土坑約25ヶ所、溝約10ヶ所、井戸12ヶ所を調査し、3月12日に完了した。

3月12日 午後から矢尻遺跡の調査に着手する。遺跡は「く」字形に屈曲しており、屈曲部の東を1区、西を2区と呼称し、調査区1区から調査に着手した。遺構は、住居跡1ヶ所、溝2ヶ所、井戸2ヶ所等であった。調査は天候にも恵まれまた遺構数も少なく、3月18日までに完了した。

3月19日 坪内遺跡の調査を開始する。坪内遺跡は、遺跡の東部に「T」字形に直交して調査区が設定された。南北方向の調査区を1区、東西方向の調査区を2区と呼称した。発掘調査は1区北側から着手し、順次南へ移動して、2区の調査へと移行した。住居跡7ヶ所、溝7ヶ所、井戸状遺構2ヶ所、土坑22ヶ所等の遺構を調査し、3月29日に終了した。

II 発掘調査の方法

発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業区域の水路用地に限定された範囲で実施され、調査区域の幅約2.4mの狭長な範囲である。従って遺構の全容を把握することは困難な状況であった。発掘調査区域は必要に応じて、各遺跡毎に調査区を1～3区に区分して発掘調査を実施した。

発掘調査区域の表土掘削はパワーショベルに法面バケットを装着して行い、遺構の確認作業から人手による作業を行った。遺構番号は各遺跡毎に通し番号で呼称したが、押尾古屋敷遺跡は、調査区毎に通し番号で呼称した。

発掘調査は各遺構に1～2本の上層観察用ベルトを設定することを基本とした。また調査区両側の境界部壁の土層観察も考慮した。

遺構内出土遺物は出土位置等を記録して取り上げるとともに、必要に応じて遺物出土状況微細図を作成した。住居跡カマドは原則として「キ」印に土層観察用ベルトを残し、カマドの構築方法等を観察することとした。

発掘調査の測量は、調査区域内に設定した基本杭（約20mピッチ、公共座標、水準値を設置）を

利用し、光波測距儀とデータコレクターを使用して行った。遺構の平面図等は、空中写真測量を活用することとし、その他土層図や遺物出土状況微細図等は現地にて実施した。

第三章 遺跡の地理的環境

押尾古屋敷遺跡は茨城県真壁郡明野町大字押尾地内に、矢尻遺跡と坪内遺跡は明野町大字宮山地内に所在する。

明野町は西を利根川へ流入する小貝川、東を霞ヶ浦へ流入する桜川に挟まれた、標高約20～38mの緩やかな起伏のある地形の上に位置している。南流する小貝川や桜川に並行して、明野町を南北に走る尾根状の丘陵と、水田が開ける低地とが交互に展開している。遺跡の東方（桜川の東岸）には筑波山が間近にそびえている。

遺跡は明野町市街地から約2km東方に位置し、筑波山の麓を南流する桜川に西岸に所在する。遺跡は東を桜川の沖積地に面し、西は明野町を南北に走る水田地帯（標高約23mの低地）に面する。南北に延びる丘陵（標高約38m）の南端から一段低くなった標高約25～26mを潤る微高地上に、各遺跡は所在している。微高地は耕作地として活用されていることもあり、極めて平坦な地形を形成し、南方へ大きく舌状に延びている。微高地の現況は、押尾地区の集落が形成されている他は、畑等の耕作地である。

押尾古屋敷遺跡 遺跡の東は桜川の沖積地に面し、西は南北に走る低地に面している。微高地のほぼ中央部、ごく僅かに高くなった部分を中心に遺跡は営まれている。遺跡の北は、桜川の沖積地と低地によって浸食された、小さく括れた部分を形成している。この北方に矢尻遺跡が所在している。

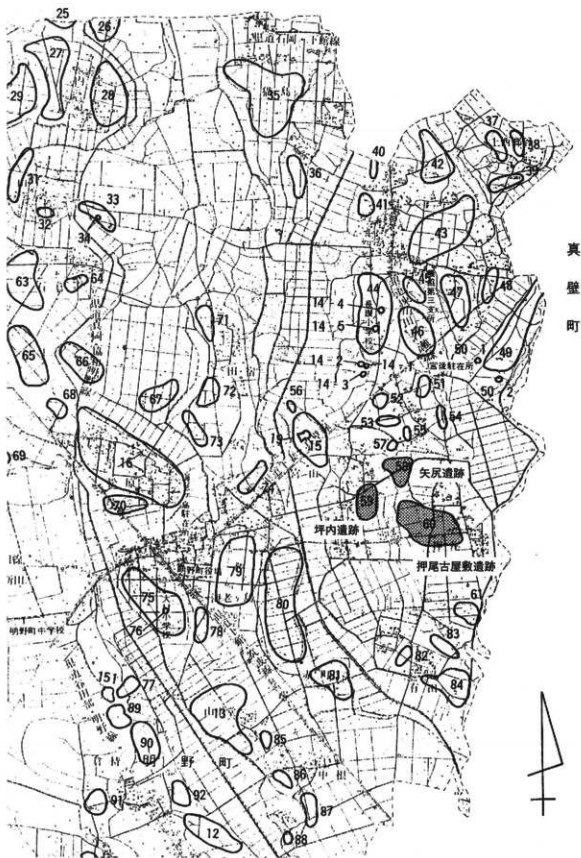
矢尻遺跡 遺跡は微高地の最も北側、丘陵地帯から一段低くなった微高地の基部に位置する。遺跡の東方は桜川の沖積地に面し、西方は低地の最深部に面する。

坪内遺跡 押尾古屋敷遺跡と矢尻遺跡の西方、低地を挟んだ対岸に所在する。遺跡は北方の丘陵から一段低くなった微高地の基部に近く、東方の低地に向かう緩やかな東斜面に営まれている。

遺跡が所在する微高地とその周辺には多くの遺跡が点在している。微高地の南端には弥生時代から古墳時代にかかる下宮遺跡、さらに南側の低地を挟んで有田北、有田東遺跡（弥生時代から奈良、平安時代）が営まれている。近年になって有田東遺跡には古墳群も確認されている。微高地北方の丘陵上には、縄文時代から中世に至る多くの遺跡が知られている。桜川対岸の真壁町にも多数の遺跡が確認されている。

表1 周辺の主な遺跡（明野町埋蔵文化財一覧から）

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
12	中東遺跡	縄文～中世	41	西後遺跡	古墳～中世	51	陣場遺跡	古墳～中世	61	F宮遺跡	弥生～古墳
14	宮山古墳群	円墳5基	42	新田遺跡	古墳～中世	52	犬馬場遺跡	縄文～平安	76	稲佐塚古墳	方形
15	宮山遺跡	縄文～中世	43	宮後東原遺跡	古墳～中世	53	碓西遺跡	古墳～中世	79	海老ヶ島東原遺跡	古墳～中世
16	海老ヶ島城跡	室町時代	44	天神遺跡	縄文～古墳	54	白台遺跡	古墳～中世	80	船野遺跡	縄文～中世
19	宮山観音古墳	前方後円墳	46	窟内遺跡	古墳～中世	55	碓西南遺跡	古墳～中世	81	本町遺跡	古墳～中世
34	八坂神社古墳	円墳	47	原山遺跡	古墳～中世	57	山合遺跡	中世	82	有田内遺跡	古墳～平安
35	龜手前遺跡	古墳～中世	48	高後金井遺跡	古墳～中世	58	矢尻遺跡	古墳～中世	83	有田北遺跡	古墳～中世
38	上ノ原遺跡	古墳～中世	49	駒込遺跡	縄文～古墳	59	坪内遺跡	古墳～中世	84	有田東遺跡	弥生～古墳
39	光野遺跡	縄文～中世	50	駒込古墳群	円墳2基	60	押尾古屋敷遺跡	古墳～中世			



真壁町

図1 周辺の遺跡

押尾古屋敷遺跡

第四章 押尾古屋敷遺跡の概要

押尾古屋敷遺跡は、茨城県真壁郡明野町大字押尾562番地外に所在する。

遺跡は微高地上に広範囲に営まれているが、今回調査した範囲は、微高地のほぼ中央部と思われる場所2ヶ所と、微高地の北縁部と推定される場所1ヶ所の合わせて3ヶ所である。

調査区は、いずれも押尾古屋敷遺跡を東西方向に横断するように設定された。微高地のほぼ中央部に設定された調査区は、調査区の西側約4分の1を南北に縦断する道路により分断されており、調査区東側を1区、西側を2区と呼称した。微高地の北部に設定された調査区を3区と呼称して発掘調査に着手した。調査区1区は微高地では僅かに高い部分であり、2区は西斜面に位置する。微高地の現況は、畑と水田であり、平坦な地形を示している。調査区1区は全長約184m、面積約440㎡、2区は全長約45m、面積約108㎡、3区は全長64m、面積約153㎡を測り、発掘調査総面積は約700㎡である。

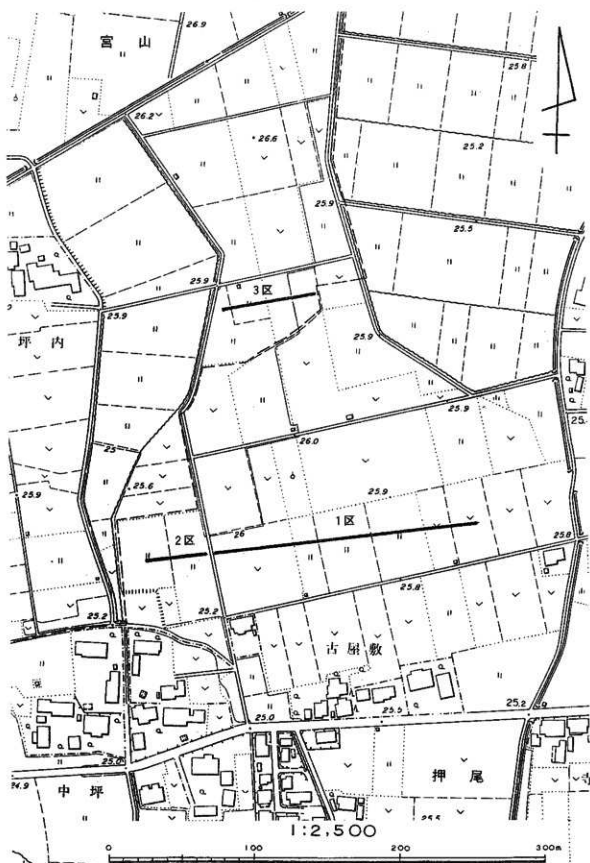
微高地の基本的な土層序は、約25cmの耕作土、10～25cm程の褐色土そしてローム層、黄褐色粘土層、青白色粘土層へと移行する。ローム層は比較的薄く約80cmである。黄褐色粘土層は約20cmの厚さである。青白色粘土層には砂をやや多く含んでいる。多くの遺構はローム層に構築されているが、井戸や一部の溝はローム層下の白色粘土層にまで達する遺構もある。

押尾古屋敷遺跡1区からは、住居跡9ヶ所、土坑21ヶ所、井戸12ヶ所、溝11ヶ所、堀1ヶ所が検出されている。住居跡は調査区の西側に多く検出されている。住居跡からの出土遺物は、奈良・平安時代に位置される土師器が主である。土坑は調査区域のほぼ全域に検出されているが、土坑の性格等は不明である。耕作に係わる土坑も多く見られるようである。溝は調査区を南北に縦断しており、規模や形状等が比較的類似したものが観察されている。調査区の西部で検出された溝と、東部で検出された溝とは規模等に差異があり、異なった使用目的で構築されているようである。堀は調査区のほぼ中央部に位置し、堀の北東部コーナーから直線的に西方へ延びている。堀の断面形は「茶研堀」の形を呈する。堀の覆土からは内耳のホーロクや灯明皿が多量に出土している。井戸は調査区の全域に検出されている。井戸の形状はフラスコ形を呈しているものが多く、ロート状の井戸は少ない。重複した井戸も観察され、調査区1区の西部で3ヶ所の井戸が重複している。井戸からの出土遺物は少ないが、筑波山系から産出される御影石が投棄された井戸も多く観られる。

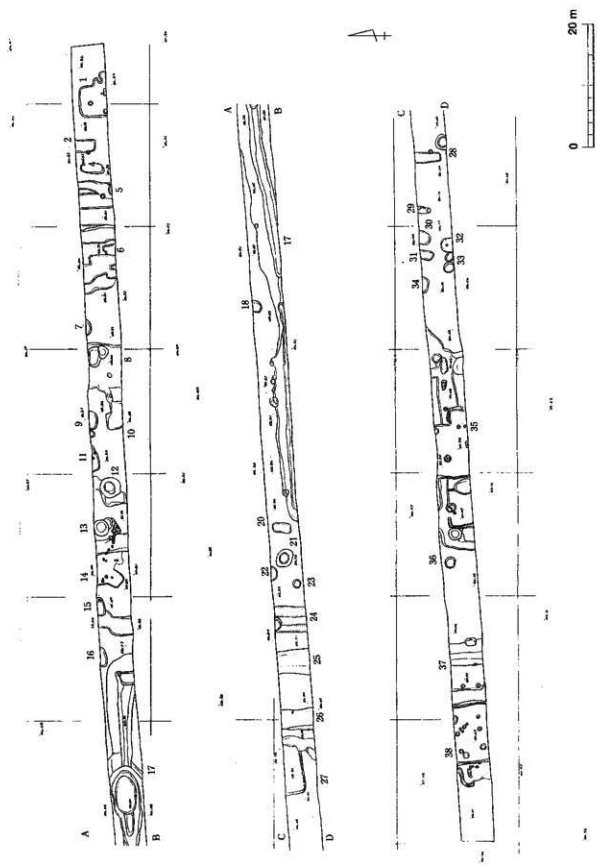
押尾古屋敷遺跡2区からは、住居跡1ヶ所、土坑6ヶ所、井戸1ヶ所が検出されている。住居跡は耕作の影響を受け、形状が明瞭ではない。2区は水田であった影響であろうか、表土が浅くローム層表面も暗茶褐色に変化している。遺物の出土量は少ない。

押尾古屋敷遺跡3区からは、住居跡1ヶ所、土坑2ヶ所、溝3ヶ所が検出されている。住居跡は溝により攪乱を受け、僅かに残存したカマドにより確認されたものである。溝は2回から3回の重複が見られる。遺物の出土量は少ない。

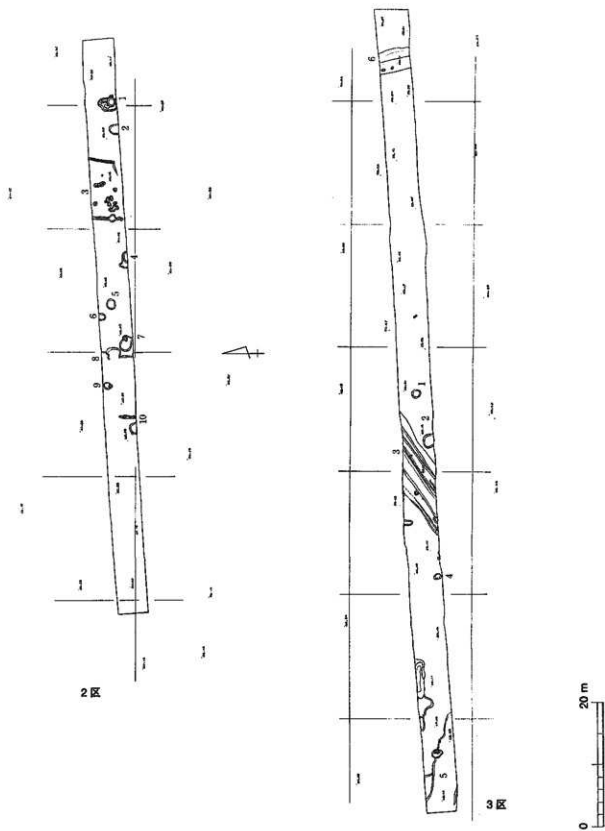
出土遺物は調査区1から多く出土し、調査区2区、3区からは少ない。遺物は1-17号堀からの出土量が大半を占め、器種は内耳ホーロクと灯明皿が主体である。遺物は破片がほとんどであり、接合できる破片は少ない。住居跡からは土師器が多く、三足付皿形土器や、高台付椀形土器等が出土している。溝や土坑からの出土遺物は少ない。



第2図 押尾古屋敷遺跡



第3図 押尾古原敷遺跡1区全体図



第4图 押尾古屋敷遺跡2、3区全体图

第五章 遺構と遺物

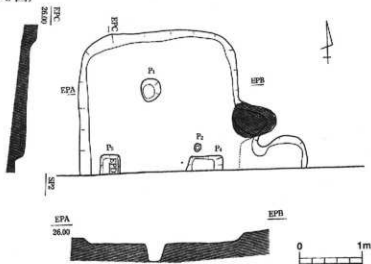
I 住居跡と出土遺物

1. 1-1号住居跡と出土遺物 (第5図)

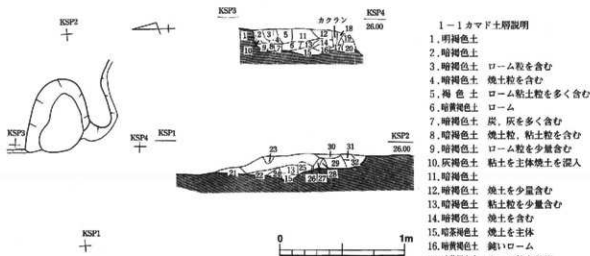
住居跡は調査区の最も東に位置する。狭長な調査区であるために、住居跡の北側約2/3を調査した。住居跡の南東側は性格が明確ではない遺構等によって切れ、住居跡南は調査区域外である。

形状 東西2.58m, 南北は1.70mまで測り、深さ12cm, 平面形は方形を呈する住居跡であろう。床は平坦であり、全体として壁緻である。特にカマド周辺の床は堅く踏み固められているが、西側床はやや軟弱である。壁は直立する。ピットは4ヶ

所で検出されているが中央部のP1が柱穴であろう。P1の規模は径35cm, 深さ28cmを測り円形である。住居跡の南西部に見られるP3, P4は、耕作土直下から掘り込まれており本住居跡に伴うピットではない。P3は32×30cm, 深さ18cmを測り方形を呈する。P3からは脆い方形の石(筑波山系の御影石が風化したもの)が発見されている。P4は東西56cm, 南北は22cmまで測り、深さ6cmの方形或いは長方形を呈するであろう。壁間溝は検出されていない。



第5図 1-1住居跡 (1:60)



第6図 1-1カマド (1:30)

- | | | |
|------------------------|---------------------------|----------------------|
| 20. 暗褐色土 焼土及びロームを含む | 21. 暗褐色土 焼土粒を多く含むややしまりがある | 22. 黒褐色土 炭化物を多量に含む |
| 23. 暗黄褐色土 粘性があるロームブロック | 24. 暗黄褐色土 鈍いローム | 25. 暗褐色土 焼土粒を含む |
| 26. 灰褐色土 粘土を主体焼土含む | 27. 暗褐色土 粘土焼土をやや多く含む | 28. 暗長褐色土 焼土ブロック |
| 29. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む | 30. 褐色土 焼土を少量含む | 31. 暗黄褐色土 鈍いローム一部に焼土 |
| 32. 暗褐色土 焼土粒炭化物を含む | | |

1-1カマド土層説明

1. 明褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土 ローム粒を含む
4. 暗褐色土 焼土粒を含む
5. 褐色土 ローム粘土粒を多く含む
6. 暗黄褐色土 ローム
7. 暗褐色土 炭、灰を多く含む
8. 暗褐色土 焼土粒、粘土粒を含む
9. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
10. 灰褐色土 粘土を主体焼土を混入
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土 焼土を少量含む
13. 暗褐色土 粘土粒を少量含む
14. 暗褐色土 焼土を含む
15. 暗黄褐色土 焼土を主体
16. 暗黄褐色土 鈍いローム
17. 暗黄褐色土 ローム粒を主体
18. 暗褐色土 焼土を極少量含む
19. 暗褐色土 焼土粒を含む
20. 暗褐色土 炭化物を多量に含む
21. 暗褐色土 焼土粒を含む
22. 暗長褐色土 焼土ブロック
23. 暗黄褐色土 鈍いローム一部に焼土

カマド (第6図) 住居跡東壁のほぼ中央部に位置し、東壁に直交して構築されている。カマドの南側は攪乱を受けている。カマドはロームと粘土を用いて構築されているが、粘土が観察される量は少ない。袖部の状態や焚き口及び燃焼部の保存状態等は良好とは言えない。規模は東西60cm, 南北55cm, 東壁の掘り込み50cmを測る。カマドの燃焼部の掘り込みは見られず、燃焼部から緩やかな傾斜で煙道部へと立ち上がっている。カマドの保存状態は良好とは言いがたい。

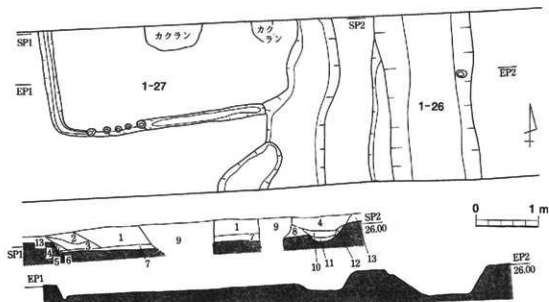
出土遺物 本住居跡からは土師器等の小破片が20点ほど発見されているが、図示できる遺物は出土していない。

2. 1-27号住居跡と出土遺物 (第7図)

住居跡は調査区のほぼ中央部に位置し、住居跡の南側約1/2が調査の対称となった。住居跡の東側は、溝状の攪乱を受けており、東側の形状は明瞭ではない。住居跡北側は調査区域外である。

形状 東西4.11m, 南北は1.70mまで測る。深さは10cmを測り、平面形は方形を呈する住居跡である。床は平坦であり、全体的に良く踏み固められており保存状態は良好であるが、数ヶ所で攪乱を受けている。壁は直立する。柱穴は確認できなかった。壁周溝は幅約18~20cm, 深さ約10~15cmを測り、住居跡を一周するものと推定される。壁柱穴と観られる小ピットが、住居跡南壁に沿って5ヶ所で確認されている。その規模は径9~10cm, 深さ10~12cmを測る。

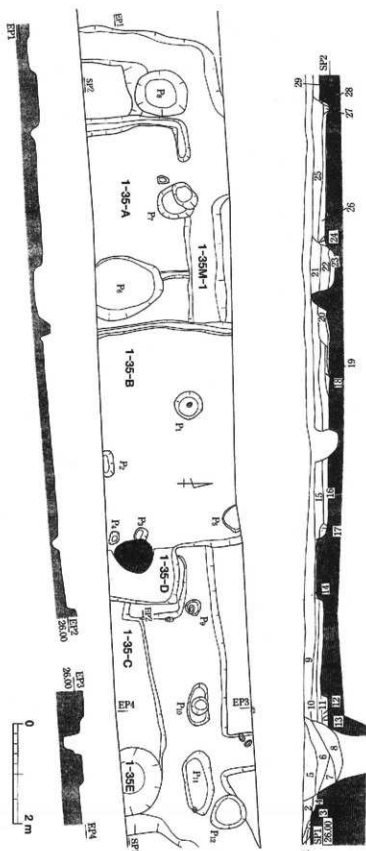
出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も5片と少なく図示できる遺物は出土していない。



1-27号住居跡

- | | | | | | |
|---------|--------------------|---------|-----------------------------|----------|---------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を多く含む、後土粒を混入する | 7. 暗褐色土 | ローム粒、にぶいロームブロックを含む、ややしまりがある | 10. 暗褐色土 | ローム小ブロックを含む |
| 2. 褐色土 | ローム粒を極めて多く含む | 8. 暗褐色土 | | 11. 褐色土 | にぶいローム、ロームブロックを多く含む |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒をやや多く含む | 9. 暗褐色土 | ローム粒を少量含む | 12. 暗褐色土 | ロームブロック |
| 4. 明褐色土 | にぶいロームを主体 | | | 13. 褐色土 | |
| 5. 暗褐色土 | にぶいロームブロックを少量含む | | | | |
| 6. 暗褐色土 | | | | | |

第7図 1-26溝 1-27住居跡 (1:60)



第8図 1-35住居跡 (1:60)

1-35土層説明

1. 暗褐色土 焼土を少量含む
2. 暗褐色土 焼土をやや多く含む
3. 暗褐色土 焼土をより多く含む
4. 暗褐色土 焼土、粘土を含む
5. 暗褐色土 ローム粒を含む
6. 暗褐色土 ローム粒ロームブロックを含む
7. 暗褐色土 ロームの小ブロックを少量含む
8. 暗褐色土 砂、小石を多く含む
9. 暗褐色土 焼土を混入する
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土 ロームロームブロックを含むややしまりがある
12. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
13. 暗褐色土 ソフトローム
14. 暗褐色土
15. 暗褐色土 ローム粒ローム小ブロックを多く含む
16. 暗褐色土 ロームブロック、鈍いロームを多く含む
17. 暗褐色土 焼土粒を混入する
18. 暗褐色土 白色粘土粒を混入する
19. 青白色土 粘土層
20. 暗褐色土 粘土ブロック 多く含む
21. 暗褐色土
22. 暗褐色土 鈍いロームを含む
23. 暗褐色土 ロームを多く含む
24. 黄褐色土 ソフトローム
25. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
26. 暗褐色土 ローム粒ロームを混入
27. 暗褐色土 やや明るい鈍いロームを多く含む
28. 明褐色土 鈍いローム
29. 褐色土

表2 1-35ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	60×58	43	円形	粘土を貼る	5	55×32	5	円形		9	33×30	34	円形	
2	54×20	20	長方形	カクラン	6	127×134	32	楕円形	カクラン?	10	84×32	36	楕円形	
3	35×27	11	楕円形		7	70×78	12	円形		11	133×57	16	楕円形	
4	25×18	10	円形		8	90×105	16	円形		12	70×73	14	円形	

3. 1-35号住居跡と出土遺物(第8~11図)

調査区の西側に位置し、4ヶ所の住居跡が検出されている。住居跡は西から1-35A、35B、35C、35Dと呼称し記述する。1-35B、35C、35D号住居跡は重複している。各住居跡は溝等による擾乱を受けたり、一部が調査区域外であるために、住居跡の全容を知ることは不可能であった。

(1) 1-35A号住居跡と出土遺物(第8図)

住居跡の北部約1/4を調査したもので、住居南部は調査区域外となっている。住居跡の西から北へ、住居跡に沿うように走る溝(1-35M-1)により住居北壁は擾乱を受けている。住居跡東南部には大きな土坑状の擾乱を受けている。

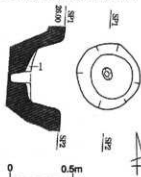
形状 東西3.30m、南北は2.40mまで測る。深さは10cmを測り、平面形は方形を呈するであろう。床は平坦であり、全体に堅く踏み固められた良好な保存状態である。柱穴は検出されなかった。壁周溝は幅約15~30cm、深さ約10~15cmの規模で西壁と東壁に沿って検出された。壁は直立する。カマド等は検出されなかった。

出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。

(2) 1-35B号住居跡と出土遺物(第8~11図)

住居跡の北側約1/2を東西に横断するように調査した。住居跡の北側は溝(1-35M-1)による擾乱を受け、南側は調査区域外となり、住居跡の全容を知ることはできなかった。住居跡東側は、1-35Cと1-35D住居跡と重複或いは隣接している。

形状 東西4.45m、南北は2.60mまで測る。深さ13cmを測り、平面形は方形を呈する。床は平坦であり、堅く踏み固められた良好な保存状態である。床面直上には青白色粘土の堆積が観察された。青白色粘土層は1~5cmの厚みで、カマドの周辺を除き、床の全面を広く覆っている。粘土層は住居跡南側により厚く堆積している。住居跡南部にブロック状に堆積していた粘土層が、住居跡の埋没に合わせて広く床面を覆いつくしたような状態を想定される堆積である。床と粘土層の間には、床の敷物の痕跡であろうか、薄い黒褐色土層が見られる。



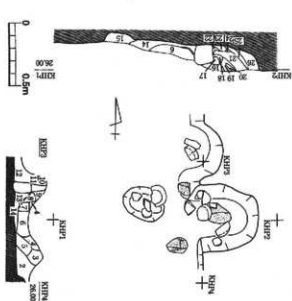
1. 青白色粘土層

第9図 P1(1:30)

ピットは4ヶ所で検出されている(表-2)。P1は特徴のあるピットであり(第9図)、住居跡の中央部に位置し、規模は60×58cm、深さ43cmを測り、平面形は円形を呈する。ピットの底部には1~2cmの厚さで青白色粘土が貼られ、ピット底の中央部に直径5cm、深さ15cmを測る円形の小ピットが穿がれている。P1の覆土から土師器三足付皿形土器(三足盤)が1点出土している。本住居跡は粘土の堆積やP1の形状等から、土器の工房跡を推察させる遺構である。

柱穴と推定されるピットは検出されていない。壁周溝は西側壁に沿って確認されたが、東では検出されなかった。壁周溝は幅8~15cm、深さ15~20cmを測る。壁は直立する。

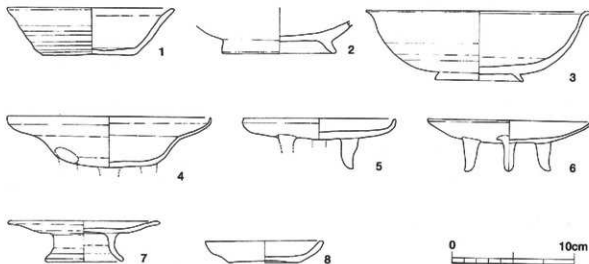
カマド(第10図) カマドは住居跡東壁を穿って構築され、さらにカマドは1-35D住居跡に乗って造られている。規模は全長80cm、幅55cmを測り、東壁の掘込みは45cmである。カマドの両袖部は中心部に長方体の御影石を置き、その周囲に粘土とロームを巻いている。カマド中央部には御影石を利用した支脚を設置している。カマドの構築材としては、粘土とロームを使用しているが、粘土が観察される量は少ない。燃焼部の掘り込みは少なく平坦であり、燃焼部からやや急な傾斜をもって煙道部へと移行している。燃焼部から煙道部は、良く焼けた痕跡が明瞭に観察され、カマドの保存状況は良好である。カマドからは高台付碗形土器や三脚付杯形土器等多数の遺物が出土している。



第10図 1-35Bカマド(1:30)

カマド上層説明

- | | | | |
|----------|------------------------|----------|----------------|
| 1. 黄褐色土 | ローム | 13. 暗褐色土 | |
| 2. 暗褐色土 | やや押し
まりがある | 14. 暗褐色土 | 柔らかい炭
化物を含む |
| 3. 暗褐色土 | 焼土小ブロッ
クを含む | 15. 明褐色土 | 焼上げたロ
ーム |
| 4. 暗褐色土 | 焼土ブロック
を少量含む | 16. 明褐色土 | 焼けたロー
ム |
| 5. 黄褐色土 | 焼土に暗褐
色土を混入 | 17. 暗褐色土 | 焼土主体と
する |
| 6. 暗褐色土 | 焼土ブロッ
クを少量、
柔らかい | 18. 暗褐色土 | 焼土粒を多
く含む |
| 7. 暗褐色土 | 焼土を多く
含む | 19. 暗褐色土 | |
| 8. 暗褐色土 | 焼土をやや
多く含む | 20. 暗褐色土 | 焼土 |
| 9. 暗褐色土 | 焼土混入し
まりあり | 21. 暗褐色土 | 焼土粒を少
量含む |
| 10. 暗褐色土 | 焼土粒を多
く含む | 22. 暗褐色土 | 焼土を主体
とする |
| 11. 黄褐色土 | 焼土 | 23. 暗褐色土 | 焼上げたロ
ームを含む |
| 12. 暗褐色土 | ローム混入
しまりあり | 24. 暗褐色土 | 焼土を含む |
| | | 25. 暗褐色土 | 焼土粒を混
入する |
| | | 26. 黒褐色土 | |



第11図 1-35B出土遺物(1:3)

出土遺物 (第11図) 今回の調査では最も多くの遺物を出土した住居跡である。1-35住居跡全体では約640点の遺物を出土しているが、その大半を1-35B住居跡が占め、約530点を数える遺物が出土している。遺物は土師器が主体であり、須恵器は少ない。出土遺物は破片が多く、接合できない遺物が多数を占める。遺物の器形は土師器瓶形土器や、内面を黒色加工を施した三足付皿形土器等が出土している。

表-3 1-35B出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法量	形態・成形手法	調整手法	胎土・色調	備考
11	須恵器 -1 坏	口径 13.6 番高 3.9	ロクロ使用 底部へう削り	口縁外ヨコナデ 口縁下へう削り	小石を含む 灰褐色	やや粗雑な仕上がりがり
11	須恵器 -2 高台付椀	底径 9.1 高台高 1.2	ロクロ使用、高台貼付 底部糸切り		小石を多く含む やや赤褐色を帯びる	底部破片
11	土師器 -3 高台付椀	口径 18.3 底径 7.2 器高 5.7 高台高 0.6	ロクロ使用、口縁部外反 底部糸切り後ナデツケ 高台貼付、外反する	口縁部ヨコナデ 口縁部下へう削り 内面ヨコナデ 底部内面縁方向のへう磨き	小石少なく、雲母多く混入 内面は黒褐色 外面は明褐色、うすい黒斑点打り 雲母混入	焼成は堅緻 カマド出土 三足を欠損
11	土師器 -4 三足付皿	口径 16.6 皿部高 4.2	口縁部大きく外反 三足貼付	全体を丁寧な磨き	内外面黒褐色仕上げ	焼成は堅緻
11	土師器 -5 三足付皿	口径 12.4 皿部高 1.8 三足高 2.5	三足貼付 三足径1.4を測る円筒形 接地部外反する	口縁部ヨコナデ 内面底部へう磨き	雲母少量混入 褐色、うすい黒斑あり	三足の内2本を欠損 カマド出土 焼成は良好
11	土師器 -6 三足付皿	口径 13.2 皿部高 2 三足高 2.7	三足貼付 三足径1.2を測る円筒形 接地部外反する	外面へう削り後へう磨き 内面へう磨き	雲母を少量混入 褐色	P1出土 焼成は良好
11	土師器 -7 高台付盤	口径 12.3 底径 6.4 盤部高 1.0 高台高 2.4	高台部貼付、接地部 向かい外反する	ロクロ使用 内外面ともに丁寧な磨き	雲母を混入 褐色	カマド出土 焼成は良好

(3) 1-35C号住居跡と出土遺物 (第8図)

住居跡の大半は調査区外にあり、僅かに残存した住居跡の北部を調査した。住居跡の東部は井戸によって切られ、西部は1-35Dに接している。

形状 東西が3.00m、南北が0.85mまで測れる。深さ8cmを測り、平面形は住居北壁の状況から方形或いは長方形を呈するものと推定される。住居跡の覆土には多量の焼土が含まれていた。床はやや軟弱であり良好とは言えない。柱穴、壁周溝は確認されていない。カマド等も検出されていない。

出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。

(4) 1-35D号住居跡と出土遺物 (第8図)

本住居跡の上に1-35B住居跡カマドが構築されている。住居跡北東部を僅かに調査したもので、住居跡南部は調査区域外である。

形状 東西が1.10m、南北が1.50mまで測れる。深さは14cmを測り、平面形は方形或いは長方形

を呈する住居跡であろう。住居跡は黒褐色土の覆土を持ち、床が比較的良好に保存されていた。床は貼り床である。柱穴、壁周溝、炉或いはカマド等は確認されていない。

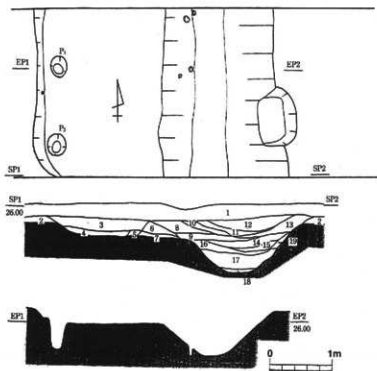
出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、図示できる遺物は出土していない。

4. 1-37号住居跡と出土遺物 (第12図)

調査区の西側に位置し、住居跡の中央部を東西に横断して調査した。住居跡北部と南部は調査区域外である。住居跡東部は幅1.76mの溝によって切られている。

形状 東西が2.10m、南北が2.40mまで測れる。深さ23cmを測り、平面形は方形を呈する。住居跡南西部にはコーナーの一部と推定される屈曲部が観察される。床はローム層を直接使用し、平坦である。比較的良好に踏み固められた床である。ピットは、住居跡西壁に沿って2ヶ所で検出された。P1は径28×34cm、深さ44cmを測る円形、P2は径31×36cm、深さ39cmを測る円形を呈する。ピット的位置や形状等が類似しており、2ヶ所のピットが主柱穴に相当するであろう。壁周溝は検出できなかった。壁は床面から多少湾曲して立ち上がり、壁上部は直立する。カマドは発見されていないが、調査区北縁の土層から粘土と焼土が観察されていることから、カマドは住居跡北壁に構築されている可能性が推定される。

出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。



1-37号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒を含み粘性に乏しい
2. 褐色土
3. 暗褐色土 鈍いローム、ロームブロックをやや多く含む
4. 明褐色土 ロームブロックを主体とする
5. 暗褐色土 灰褐色粘土焼土ブロックを含む
6. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
7. 暗褐色土 焼土ブロック、焼土粒を含む、炭化物も極少量ある
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土 しまりが強い
10. 明褐色土 ローム粒を主体とする、ややしまりがある
11. 暗褐色土 ローム粒を少量含む、やや暗い
12. 暗褐色土 ローム粒を多く含む、やや明るい
13. 褐色土 ローム粒を極めて多く含む
14. 褐色土 ローム粒を極めて多く含む、しまりがある
15. 暗褐色土 ローム粒を混入、しまり、粘性ある
16. 明褐色土 しまり強い、粘性ややあり
17. 暗褐色土 焼土粒を少量含む、しまり、粘性強い
18. 明褐色土 変色したローム、ローム粒を主体とする
19. 暗褐色土 鈍いロームを主体とする

第12図 1-37号住居跡 (1:60)

5. 1-38号住居跡と出土遺物 (第13図)

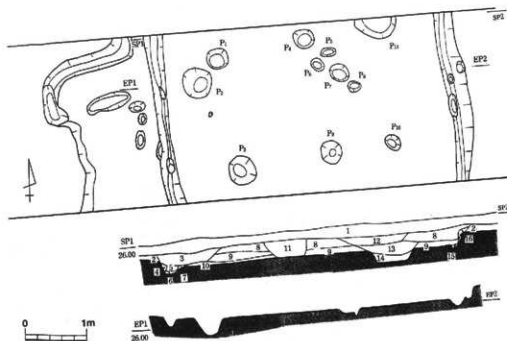
調査区1区の最も西に位置し、住居跡の中央部を東西に横断するように調査した。住居跡の北部と南部は調査区外となっている。今回の発掘調査では最も規模の大きな住居跡である。

形状 東西5.07m、南北が2.40mまで測る。深さ16cmを測り、平面形は方形を呈する。床は平坦であり、全体に良く踏み固められ保存状況は良好である。ピットは7ヶ所で発見されている。ピットの位置や形状等から、P1、P2、P3が柱穴として掘られたピットであろう。壁周溝は住居跡西壁と東壁に沿って検出されており、住居跡を全周するものと推定される。規模は幅25~30cm、深さ8~13cmを測る。壁周溝には壁柱穴と思われる小ピット数カ所で観察される。カマド等は確認されていない。本住居跡西側は、性格不明の落ち込みと重複している。土層にはいくつかのカクランを観察される。
出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、図示できる遺物は出土していない。

表-4 1-38号住居跡ピット一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	5×33	32	円形	柱穴	5	28×12	5	楕円形		9	34×37	26	円形	
2	48×46	28	円形	柱穴	6	22×21	5	円形		10	25×24	5	円形	
3	45×48	31	円形	柱穴	7	34×27	6	円形		11	66×36	15	円形	カクラン
4	34×32	12	円形		8	25×18	5	楕円						



第13図 1-38住居跡 (1:60)

1-38号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒を含む
2. 褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土 鈍いローム主体
5. 暗褐色土 ローム小ブロックを含む
6. 褐色土 鈍いローム、ローム粒主体
7. 褐色土 暗褐色土を混入

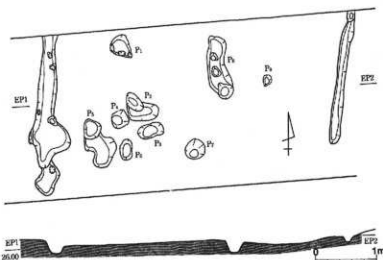
8. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含む
9. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。焼土、炭化物混入
10. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む、しまり有り
11. 暗褐色土 攪乱
12. 暗褐色土 赤色スコリアを含みやや暗い

13. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
14. 暗褐色土 ローム粒、ローム小ブロックやや多く含む、しまりがある
15. 褐色土 鈍いローム主体
16. 暗褐色土

6. 2-3号住居跡と出土遺物 (第14, 15図)

調査区2区の中央部に位置する。水田の影響であろうか、ローム層が鉄分を多く含みやや茶褐色を帯びている。住居跡を東西に横断するように調査した。住居跡の掘り込みはなく、床を確認して住居跡と判断したものである。住居跡には攪乱が多く見られ、形状は明瞭ではない。

形状 東西4.90m, 南北が2.40mまで測る。掘込みは確認されず、ローム層上面がすなわち床面である。平面形は壁周溝等から方形を呈する住居跡であろう。住居跡の軸はやや北東方向を示している。攪乱の影響が及ばない床は、比較的良く踏み固められており良好な保存状態である。ピットは9ヶ所で検出されている(表-5)。柱穴として使用されたピットは、位置や形状等からP4とP7であろう。壁周溝は住居跡東壁と西壁に沿って検出されている。壁周溝の規模は幅15~25cm, 深さ約10cmを測る。カマド等は確認されていない。



第14図 2-3号住居跡 (1:60)

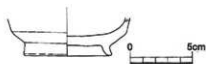
壁周溝の規模は幅15~25cm, 深さ約10cmを測る。カマド等は確認されていない。

表-5 2-3号住居跡ピット一覧

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考	No.	径	深	形状	備考
1	35×33	10	不整形		4	26×30	23	円形	柱穴	7	34×35	30	円形	柱穴
2	50×30	15	2つ重畳		5	50×80	16	不整形		8	30×10	16	不整形	
3	43×24	11	楕円形		6	25×35	10	円形		9	15×17	12	円形	

出土遺物 (第15図) 本住居跡からは土師器や須恵器の小破片が95点ほど発見されている。図示した遺物は、須恵器の高台付碗の底部である。底部径7cm, 高台高0.7cm, 現存器高3cmを測る。ロクロを使用し底部は糸切り離し後にナデの整形を行う。



第15図 2-3出土遺物 (1:3)

7. 3-5号住居跡と出土遺物 (第16図)

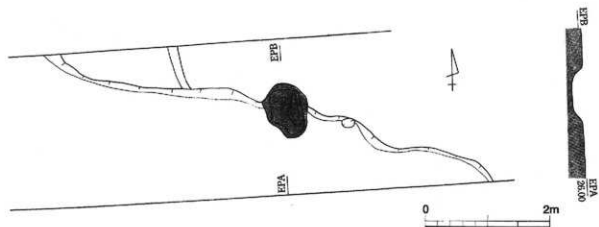
調査区3区の西部に位置する。調査区を東西に斜行する規模の大きな溝状の攪乱によって、住居跡の大半が破壊されており、住居跡北壁の一部とカマドが残存している。

形状 北壁は1.40mまで確認できた。住居跡北壁は15cmの高さで直立する。平面形は、住居跡北壁の状況等から方形を呈する住居跡であろうと推定される。床は住居跡北壁に沿って僅かに確認されたが、軟弱な床面であり、保存状態は良好とは言えない。柱穴や壁周溝は検出されていない。

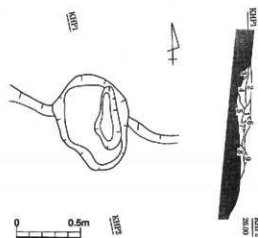
カマド (第17図) カマドの規模は幅62cm, 奥行き78cmを測り、北壁を30cmほど穿って構築されている。燃燒部は18cmほど掘り下げ、緩やかな傾斜を有して煙道部へと至る。カマドの保存状態が悪く、

袖、燃焼部、煙道部は明瞭ではない。カマドからの出土遺物は発見されていない。

出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。



第16図 3-5号住居跡 (1:60)



第17図 3-5カマド (1:30)

土層説明

1. 暗褐色土 黒色土ブロック、焼土流を含む
2. 暗茶褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土を多く含む
3. 明褐色土
4. 黒褐色土 鈍いロームをやや多く含む
5. 黄褐色土 ロームブロックを主体とし、暗褐色土を含む
6. 褐色土 焼土、粘土粒を含む、しまり有り
7. 暗茶褐色土 焼土を極めて多く含む
8. 黒褐色土 鈍いロームを混入する
9. 暗褐色土 焼土ブロックをやや多く含む

II 井戸と出土遺物 (第18, 25図, 表-6)

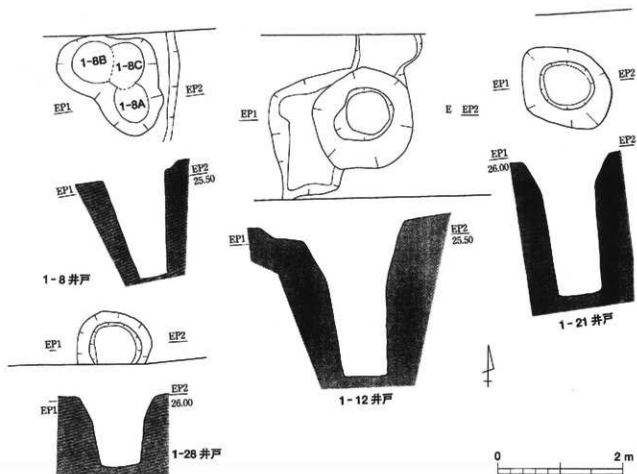
今回の発掘調査で、12ヶ所の井戸が検出されている。規模は口径1~1.5m、深さ1.7~2.5mの規模を測り、形状はフラスコ形を呈する井戸が多く観察される。井戸は青白色粘土層まで掘り下げられており、青白色粘土層の下にある礫層にまで達する井戸は確認されていない。礫層にまで達すると、鉄分を多く含んだ地下水にあたり、飲料水には適さなくなってしまうようである(地元の方の御教示)。どのような理由かは不明であるが、同一場所に3回にわたり重複して掘り下げられている井戸も所在する。遺物は発見されていないが、筑波山系から産出する御影石を数個投げ入れた井戸も確認され、集落を移動するとき等に、放棄したと思われる井戸も観られる。

井戸の調査には常に土砂が崩壊する危険が伴っており、今回は特に調査区域の境界に重なる井戸もあり、掘り下げのことを断念しなければならない井戸もあった。

表-6 井戸一覧表

(単位=m)

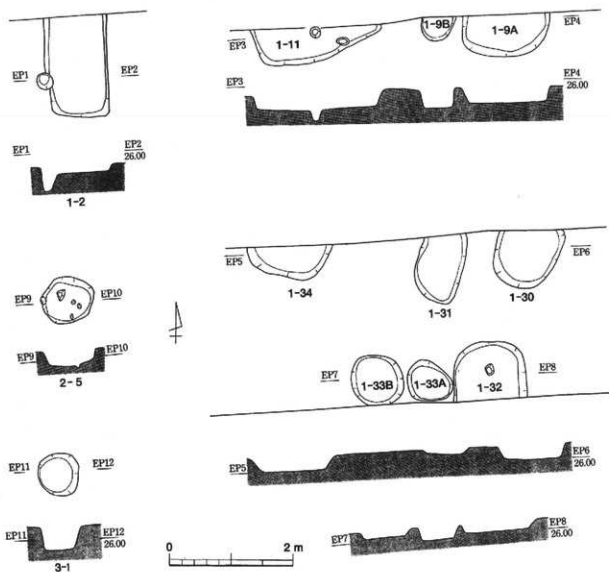
No.	径	深さ	形状	備考
1-8 A	1.04×0.84	1.71	フラスコ形	3基の井戸が重複する。第18図
1-8 B	1.00×0.95		フラスコ形	3基の井戸が重複する。第18図
1-8 C	0.95×0.95		フラスコ形	3基の井戸が重複する。第18図
1-12	2.64×1.75	2.50	ロート形	御影石 第18図
1-13	1.30×1.20	2.51	ロート形	御影石 第25図
1-17a	0.60×0.65(底部径)	1.62	不明	1-17号溝に切られる。底部は長方形。第20図
1-17B	1.70×0.90(底部径)	2.24	不明	1-17号溝に切られる。底部オーバーハング。最も規模の大きな井戸。第20図
1-21	1.43×1.35	2.26	ロート形	御影石。第18図
1-24C	0.94×0.58		フラスコ形	井戸北部は調査区外。第28図
1-28	1.24×0.89	1.25	フラスコ形	井戸南部は調査区外。第18図
1-35E	1.35×0.75		フラスコ形	井戸南部は調査区外。第8図
2-1	1.10×1.55	1.50	フラスコ形	井戸上部は視乱を受ける



第18図 1-8, 12, 21, 28井戸 (1:60)

Ⅲ 土坑と出土遺物 (第19図)

今回の調査で29ヶ所の土坑が検出されている。土坑の規模や形状は表-7のとおりである。土坑は平面形が方形を呈する土坑と円形を呈する土坑とが所在する。方形を呈する土坑は、覆土が耕作土と類似する等、近世～近代の時期である可能性が高いが、土坑の明瞭な時期等は不明である。



第19図 1-2, 9, 11, 30~34, 2-5, 3-1号土坑 (1:60)

表一 土坑一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備 考	No.	径	深	形状	備 考
1-2	102×164	10	長方形	土坑北部は調査区外、第19回 内壁に小ピット	1-30	112×96	26	円形	土坑北部は調査区外、第19回
					1-31	80×112	7	円形	土坑北部は調査区外、第19回
1-4	82×192	14	長方形		1-32	116×94	16	円形	土坑南部は調査区外、第19回
1-7	130×40	21	円形	土坑北部は調査区外	1-33A	82×70	44	円形	第19回
1-9A	143×67	26	円形	土坑北部は調査区外、第19回	1-33B	84×84	12	円形	第19回
1-9B	56×40	29	円形	土坑北部は調査区外、第19回	1-34	140×56	14	方形	土坑北部は調査区外、第19回
1-11	205×61	26	長方形	土坑北部は調査区外、第19回	1-35	88×82	23	円形	
1-14B	130×?	15	長方形	2-3基の土坑が重複、第25回	2-2	83×80	5	円形	
1-16	150×35	27	円形	土坑北部は調査区外	2-4	140×45	26	不整形	
1-18	92×73	27	円形	土坑北部は調査区外	2-5	87×75	18	円形	第19回
1-20	81×156	14	長方形		2-6	57×56	17	方形	土坑北部は調査区外
1-22	116×50	9	円形	土坑北部は調査区外	2-7	124×100	12	不整形	
1-23	38×70	40	円形		2-10	95×60	5		土坑南部は調査区外
1-28	86×214	10	長方形	土坑北部は調査区外	3-1	107×90	39	円形	第19回
1-29	65×112	15	不整形	土坑北部は調査区外	3-2	107×90	26	円形	土坑南部は調査区外、第27回

IV 堀と出土遺物 (第20~23回)

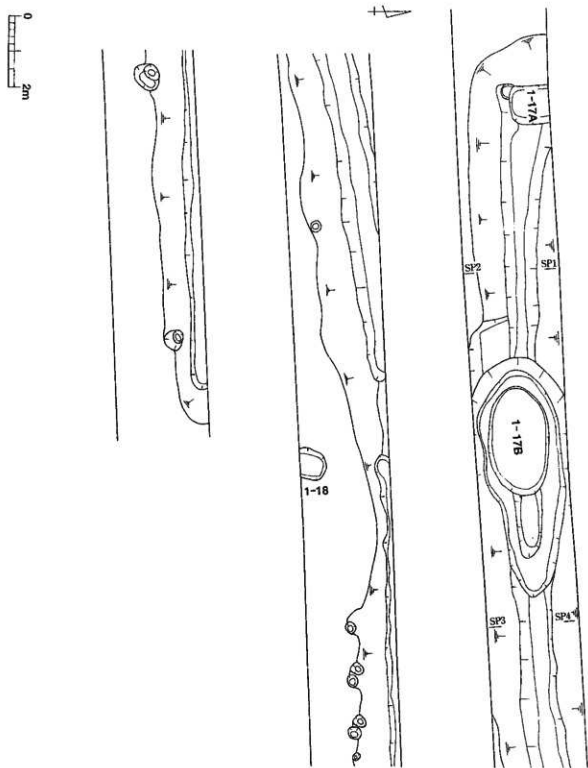
1-17号堀は調査区の中央部に位置する。調査区が狭長であるために、堀の全容を把握することは不可能であった。堀の北東部コーナーから西方向に直線的に走る堀の一部を調査したものである。堀の北東部コーナーと、中央部では井戸(1-17A, 1-17B)を切っている。

形状(第20, 21回) 堀の規模は東西約20m, 南北が2.40mまで測り、深さ1.08~1.10mである。堀の断面形は、堀の下部が「コ」の字形を呈し、中段から上部は「ハ」の字形に開く「箱築堀」の形態を示す。堀底は平坦であるが、1-17A, B井戸周辺の堀底は、地下水の影響であろうか、一段低くなっている。堀は北東部コーナーからやや屈曲しながら西方に延びている。掘りの覆土は自然の堆積を示している。

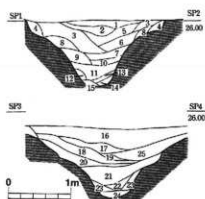
出土遺物(第22, 23回) 堀の覆土からは多数の遺物が出土しており、遺物点数は約1,000点を数える。遺物は覆土の全般にわたり、ほぼ均等に発見されている。堀の覆土は自然の堆積を示していることから、比較的長い期間にわたり遺物を投棄していたと推察される。出土遺物は内耳ホウロクと灯明皿が大半を占めている。内耳ホウロクは出土量の多さにもかかわらず接合できる破片は少なく、図示できる内耳ホウロクは第22回の4点にすぎない。ホウロクの破片は例外なく外面に厚く黒色のススが付着し、手に触れただけで黒色に汚れるほどである。胎土には雲母を混入している。ホウロクは鍋状の形態をしているものや、フライパン状を呈するもの、1個の内耳が対になっているものと、2個1組の内耳が対になるホウロクなど、幾つかの形態があるようである。灯明皿は内面に黒色のススが斑点状に付着しているものが多く観察される。灯明皿は小型で皿状のもの、やや大型で底部に油溜まりと思われる窪みを有するもの等がある。

須恵器の破片も少量ではあるが出土している。図示できる須恵器は環形土器(第24回18)のみであ

る。須恵器は覆土上層からの出上が多く、本遺構外からの流入であろうと考えられる。



第20図 1-17堀 (1:120)



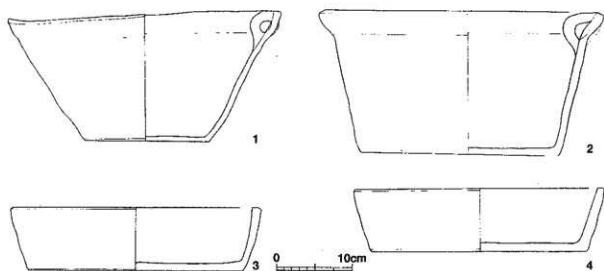
第21図 1-17土層 (1:60)

1. 暗褐色土 ローム殻を少量含む
2. 暗灰褐色土 粘土を多量に含む
3. 暗褐色土 ローム殻を含むしまり有り
4. 暗褐色土 鈍いローム
5. 暗褐色土 ロームブロック少量含む
6. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む
7. 暗褐色土 ローム殻-ロームブロックを多く含む
8. 褐色土 ローム殻を多量に含む
9. 褐色土 ローム殻粘土状含む
10. 暗灰褐色土 ローム殻粘土を多く含む
11. 暗灰褐色土 ロームブロック粘土ブロック
12. 暗灰褐色土 ローム主体粘土含む
13. 暗灰褐色土 粘土多くローム殻含む
14. 暗褐色土 粘土少量含む
15. 暗褐色土 粘土多く含む
16. 暗褐色土 鈍いローム含む
17. 暗褐色土 粘土ブロック粘土含む
18. 暗褐色土 ローム大型ブロック含む
19. 暗褐色土 ローム小ブロック-ローム殻含む
20. 暗褐色土 ローム殻粘土少量含む
21. 暗褐色土 ローム殻を多く含む
22. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む
23. 暗褐色土 鈍いローム
24. 暗褐色土 鈍いローム混入
25. 暗褐色土 やや灰褐色を帯びる

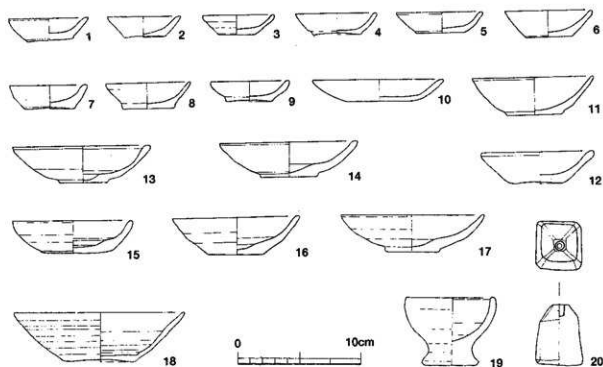
表8 1-17出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法 量	形態等	調整手法	胎土・色調	備 考
22-1	ホウロク	口径35.5 器高17.7	内耳1個, 1対		雲母混入, 焼成良, 内面褐色, 外面黒褐色	外面にスス多量に付着
22-2	ホウロク	口径37.6 器高19.0	内耳1個, 1対		雲母混入, 焼成良, 内面褐色, 外面黒褐色	外面にスス多量に付着
22-3	ホウロク	口径33.0 器高 8.4	内耳欠損		雲母混入, 焼成良, 内面褐色, 外面黒褐色	外面にスス多量に付着
22-4	ホウロク	口径33.0 器高 8.4	内耳欠損		雲母混入, 焼成良, 内面褐色, 外面黒褐色	外面にスス多量に付着
23-1	灯明皿	口径 6.4 器高 1.8	底部糸切り	内外面ナデ	小石, 雲母混入, 明褐色, 焼成良	黒色斑点, 2ヶ所
23-2	灯明皿	口径 6.0 器高 1.6	底部糸切り	内外面ナデ	雲母混入, 焼成良, 灰色がかった褐色	
23-3	灯明皿	口径 5.8 器高 1.6	口ロク使用	内外面ナデ	小石, 雲母混入, 明褐色, 焼成良	
23-4	灯明皿	口径 6.3 器高 1.9	底部へら切り	内外面ナデ	雲母混入, 焼成良, くすんだ褐色	口縁部黒色斑 4ヶ所底部内湾
23-5	灯明皿	口径 7.1 器高 1.7	底部糸切り	内外面ナデ	雲母混入, 褐色, 焼成良	
23-6	灯明皿	口径 7.2 器高 2.2	口ロク使用		雲母混入, 明褐色, 焼成良	一部欠損
23-7	灯明皿	口径 6.3 器高 1.8	底部へら切り		雲母混入, 褐色, 焼成良	
23-8	灯明皿	口径 7.1 器高 2.2			雲母混入, 明褐色, 焼成良	
23-9	灯明皿	口径 6.5 器高 1.6	底部糸切り		雲母混入, 明褐色, 焼成良	色斑1ヶ所
23-10	灯明皿	口径10.8 器高 1.7			雲母混入, 明褐色, 焼成良	1/2欠損
23-11	灯明皿	口径 9.9 器高 3.0			雲母混入, やや灰褐色, 焼成良	須恵質
23-12	灯明皿	口径 9.3 器高 2.5	底部糸切り		褐色, 焼成良	黒色斑
23-13	灯明皿	口径11.7 器高 3.1	底部糸切り		雲母混入, 鈍い褐色	油溜まり
23-14	灯明皿	口径11.3 器高 3.0	底部糸切り	内外面ナデ	小石雲母混入, 褐色	油溜まり
23-15	灯明皿	口径 9.8 器高 2.6	底部へら切り	内面ナデ	雲母混入, 暗褐色	油溜まり
23-16	灯明皿	口径10.4 器高 3.0	底部糸切り		雲母混入, 褐色	油溜まり
23-17	灯明皿	口径11.3 器高 2.9	底部へら切り		雲母混入, 褐色	油溜まり
23-18	須恵 埴	口径13.8 器高 4.0	底部へら切り	へらミガキ		
23-19	小型壺	口径 7.2 器高 5.6	底部糸切り	内外面ナデ	雲母混入, 褐色	
23-20	土製品	底径 7.2 器高 5.0		方錐形		上部0.9×1.0円形坑



第22図 1-17出土遺物 (1:5)



第23図 1-17出土遺物 (1:3)

V 溝と出土遺物 (第24-26図)

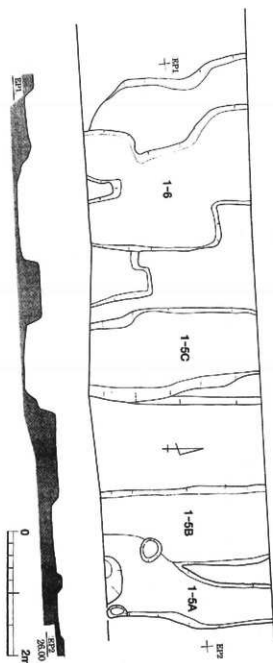
今回の調査で1区から11ヶ所、3区から3ヶ所の合わせて14ヶ所の溝が検出されている。調査区2区から溝は検出されていない。調査区が狭長であり溝の全容を把握することは不可能であった。

溝は調査区を南北に縦断して検出され、溝底が平坦で立ち上がりに傾斜を持つ「U」字形を呈する溝が多く観察される。

調査区1区から検出された溝は、1-17号堀を境に東と西では異なった様相を示している。堀の東側からは重複を含めて5ヶ所で検出されており、調査区を南北に縦断している。溝は幅1~1.50m、深さは0.15~0.41mを測り、比較的浅い溝が多い。溝の覆土は耕作土に類似した土が観察される。出土遺物は発見されておらず、溝の時期を判断する資料は少ないが、覆土の状況等から近世~現代の溝である可能性も否定できない。堀の西側からは7ヶ所で溝が検出されている。1-35M-1を除き溝は調査区を南北に縦断している。1-35M-1は幅0.56m、深さ0.15mを測り、形状は「U」形

を呈する。1-24A、1-25、1-26、1-37溝の4ヶ所は、調査区を南北に縦断し、並行するように掘り下げられている。規模に多少の差異が見られるが、形状が「U」を呈する比較的類似した溝である。溝の性格等を推定できる遺物等は出土していないが、溝は形状等から同様な使用目的で構築されているであろうと考えられる。溝の覆土はいずれも自然堆積を示している。

調査区3区から検出された溝は、3ヶ所である。3-3号溝は調査区を北東方向に斜行する。溝は堀底が平坦な「V」字形を呈し、幅約2.0m~2.5m、深さ約0.80mを測る。溝は3回重複して掘削されていることが土層断面等から観察される。調査区1区から検出された溝とは形状が異なっている。3-5号溝は調査区を北西方向に斜行している。大半が調査区域外であり、形状は不明である。3-6号溝は調査区の東側に位置し、調査区を南北に縦断する。幅約1.50m、深さ0.30~0.40mを測る。溝は2回重複している。



第24図 1-5、6号溝 (1:60)

表-9 その1 溝一覧表

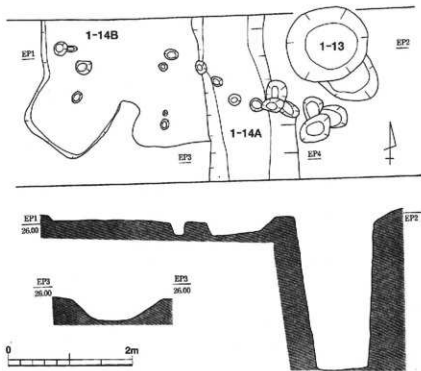
(単位=cm)

No.	幅	深	形 状	備考
1-5A	61~84	10	コ字形、屈曲、1-5B重複	第24回
1-5B	128	12	コ字形、南北、1-5A重複	第24回
1-5C	106	45	コ字形、2基重複	第24回
1-6	170	30	コ字形、土灰の重複か?	第24回
1-14A	147	33	U字形	第25回
1-24A	95	15	コ字形	第26回
1-24B	62	15	コ字形	第26回
1-25	188	50	U字形	第26回

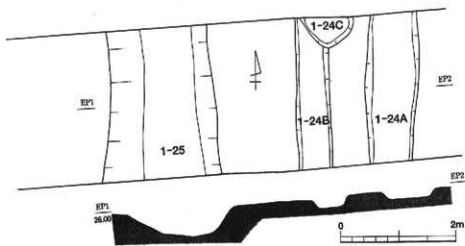
表-9 その2 溝一覧表

(単位=cm)

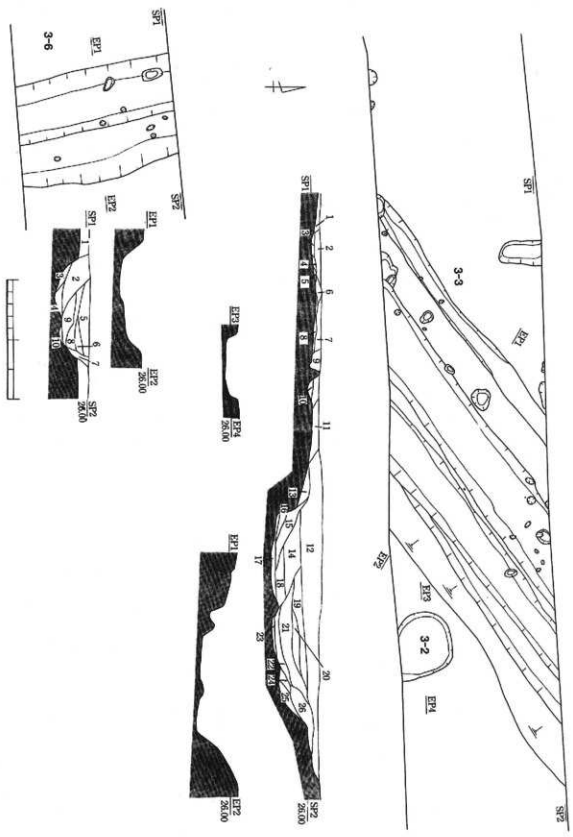
No.	幅	深	形 状	備 考	No.	幅	深	形 状	備 考
1-26	156	48	コ字形	第7図	3-3	234	80	U字形	第27図
1-35M	80	10	U字形	第8図	3-5	?	?	?	第16図
1-37	176	74	U字形	第12図	3-6	190	34	U字形	第27図



第25図 1-13井戸, 1-14溝 (1:60)



第26図 1-24, 25溝 (1:60)



第27图 3-3, 6 清 (1:60)

3-3号溝土層説明

1. 褐色土
2. 暗褐色土 ローム粒多く含む、ややしまりあり
3. 褐色土 鈍いロームを多量に含む
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
5. 黄褐色土 ローム
6. 暗褐色土 ローム粒を多量に含むやや明るくしまりあり
7. 暗褐色土 ローム粒を少量混入
8. 暗褐色土 ローム粒を少量混入、柔らかい
9. 暗褐色土 しまりがある
10. 暗褐色土 鈍いロームを混入、やや柔らかい
11. 暗褐色土 ローム粒を含み堅い、しまりあり
12. 暗褐色土 ローム粒を含むやや柔らかい
13. 暗褐色土 鈍いローム、ロームブロック
14. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む、柔らかい
15. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量、ローム粒を含む
16. 黒褐色土 ローム小ブロック含む、やや粘性あり
17. 黒褐色土 柔らかくやや粘性あり
18. 暗褐色土 ローム粒を含む
19. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む、やや明るくしまりあり

20. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、やや明るい
21. 暗褐色土 ローム粒を含み柔らかい
22. 暗褐色土 21層に類似しやや暗い
23. 暗褐色土 鈍いロームブロックを含む
24. 黄褐色土 鈍いロームブロックを含む
25. 明褐色土 鈍いロームを多量に含む
26. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含むやや明るい

3-6号溝土層説明

1. 褐色土
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒を含み柔らかい
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
6. 黒褐色土 やや堅くしまりあり
7. 褐色土 やや鈍い1層の流入か
8. 暗褐色土 黒褐色土を含み、ローム粒を少量混入する
9. 暗褐色土 ローム粒、鈍いロームブロックをやや多く含む
10. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む柔らかい

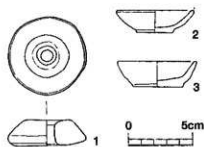
VI その他の遺物 (第28図)

表土中から発見された遺物は、土師器破片が多く須恵器等は少ない。土器片は周辺部が磨耗しているものが多い。

表-10 28図遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法 量	形態・調整手法等	胎上・色調	備 考
28-1	紡錘車	上部径 3.4 器高 2.0 底部径 6.0 孔径 1.0		砂を混入・明褐色	
28-2	灯明皿	口 径 6.2 器高 1.8	底部糸切り、丁寧な仕上げ	雲母混入	1/3欠損
28-3	灯明皿	口 径 6.3 器高 2.0	底部糸切り		黒色斑あり



第28図 その他の遺物 (1:3)

矢尻遺跡

第六章 矢尻遺跡の概要

矢尻遺跡は、茨城県真壁郡明野町大字富山18番地外に所在する。

遺跡は、明野町の東部を南北に走る丘陵（標高約38m）の南端から一段低くなった微高地の基部に営まれている。微高地は標高約26～27mを測り、微高地の東は桜川の沖積地が大きく半月状に入り込み、西は南北に延びる狭長な低地に面し、南は小さな折れ部を造りながら舌状に大きく延びている。南に延びた微高地に押尾古屋敷遺跡が所在する。

遺跡は東の沖積地に向かい緩やかな傾斜を持ち、約1mの比高差を有して沖積地に、遺跡の西は1m程の落差をもって、低地の水田に至る。

発掘調査区は矢尻遺跡を東西に横断し、調査区の中央部で「く」の字形に屈出して設定された。調査区は水路予定地であるために、幅2.4mを測る狭長な限定された区域である。東側調査区は東西方向に、西側調査区はやや北東方向に向いて遺跡を横断している。屈曲部の東側調査区を1区、西側調査区を2区と呼称して調査を開始した。矢尻遺跡の現況は畑と水田であり、平坦な地形である。

調査区1区は全長80m、面積192㎡、調査区2区は全長57m、面積136㎡の範囲であり、発掘調査区の総面積は328㎡（全長137m）である。

遺跡の基本的な土層は、約25cmの耕作土、20～40cm程の暗褐色土そしてローム層、黄褐色粘土層、青白色粘土層へと移行する。ローム層は比較的薄く約80cm、黄褐色粘土層は約20～35cmである。多くの遺構はローム層に構築されているが、井戸状遺構はローム層下の青白色粘土層にまで達している。青白色粘土層は砂をやや多く含んでいる。調査区2区のローム層は、水田の影響を受けているためであろうか、鉄分を多く含む暗茶褐色に近い色調を呈している。

矢尻遺跡1区からは、住居跡1ヶ所、井戸1ヶ所、土坑6ヶ所、溝2ヶ所が検出され、2区からは、井戸2ヶ所、土坑8ヶ所が検出されている。1-10号住居跡は2ヶ所の重複した住居跡である。住居跡は方形を呈するものと推定され、1-10B住居跡はカマドを有している。住居跡からの出土遺物は土師器が多く、須恵器は少なく発見されている。

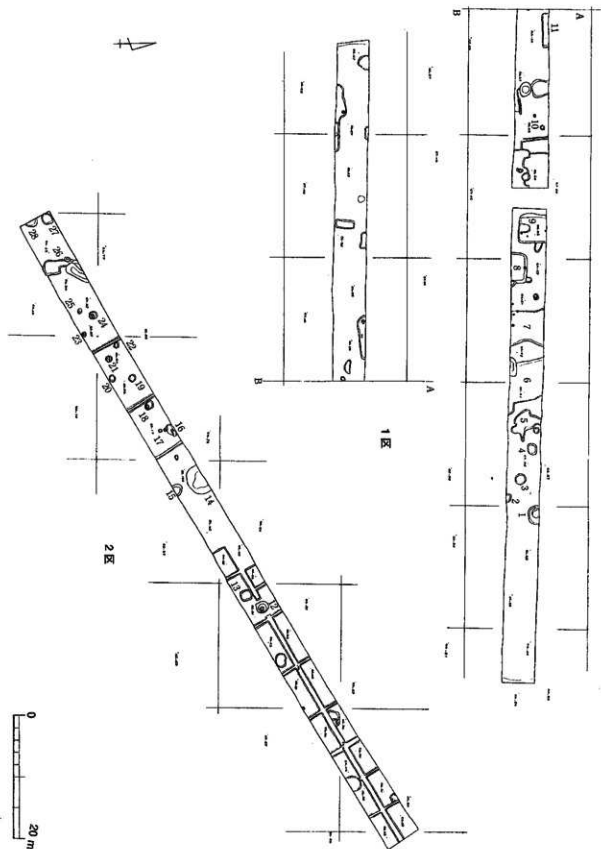
24ヶ所で検出された土坑の多くは、その性格等が明瞭ではないものが多い。2-12号土坑は土坑底を打ち固め、中央部に大きな石を設置している。2-24号土坑も土坑底を固く打ち固め、中央部に小さなピットが穿ってある。高床式建物の柱穴が想定されるピットである。

3ヶ所で検出された井戸は、2ヶ所が調査区域と接しており覆上が崩落する危険と地下水の出水のため、井戸底までは達していない。2-14号井戸は、底まで達した井戸であり、ロート形を呈する。

出土遺物は少なく、矢尻遺跡全体でコンテナの1箱にも満たない。遺物は土師器が多く出土し、須恵器は比較的出土量が少ない。遺物は土器破片であり、接合ができないものが大半を占めている。1-10号住居跡から出土した高台付椀形土器や、2-14号井戸から出土したホウロク等が図示できる数少ない遺物である。



第29図 矢尻遺跡



第30图 矢尻遺跡全体图

第七章 遺構と遺物

I 住居跡と出土遺物

1. 1-10号住居跡と出土遺物

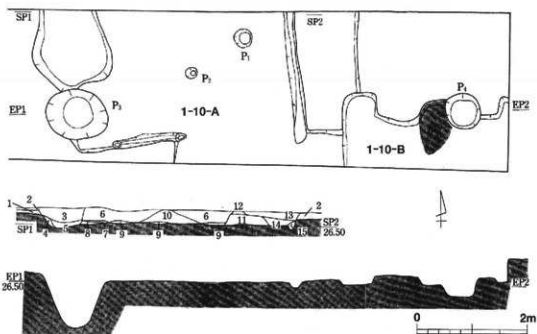
調査区1区のほぼ中央部に位置し、2ヶ所の住居跡が重複している。西側の住居跡を1-10A号住居跡、東側の住居跡を1-10B号住居跡と呼称した。本遺跡から検出された住居跡は、この2ヶ所である。

(1) 1-10A号住居跡と出土遺物 (第31, 32図)

住居跡の南部約2/3を東西に横断して調査した。住居跡の北部は調査区外である。住居跡の南東部で1-10B号住居跡と隣接する。住居跡の南西部には円形の深い土坑に切られ、北西部は不整形な擾乱を受けている。

形状 東西4.22m、南北が1.60mまで測る。深さ14cmを測り、平面形は方形を呈する。床は全体に堅く踏み固められており保存状態は良好である。ピットは2ヶ所(P1, P2)で検出されているが、形状等からP1が柱穴に使用されていたと推定される。P1の規模は径32×34cm、深さ38.5cmを測る。P2は24×22cm、深さ11cmを測り小規模のピットである。壁周溝は東壁と南壁の一部で確認できた。壁周溝の規模は幅約20cm、深さ約10cmを測る。

カマド 住居跡北部の床から多量の粘土と少量の焼土が確認されており、住居跡北壁にカマドが設置されていたものと推察される。粘土周辺から土師器が出土している。



第31図 1-10A, 10B住居跡 (1:60)

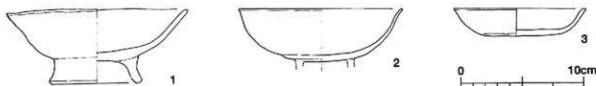
- | | | | | |
|---------|---------|-----------|----------|------------------|
| 1. 褐色土 | 6. 暗褐色土 | ローム粒を多く含む | 11. 褐色土 | 焼土ブロック焼けたロームブロック |
| 2. 暗褐色土 | 7. 暗褐色土 | 焼土含む | 12. 暗褐色土 | |
| 3. 暗褐色土 | 8. 黄褐色土 | ローム | 13. 黒褐色土 | |
| 4. 黒褐色土 | 9. 黒褐色土 | 非常に堅い | 14. 暗褐色土 | 鈍いローム多く含む |
| 5. 黒褐色土 | 10. 褐色土 | 焼土多量に含む | 15. 暗褐色土 | やや暗い |

出土遺物(第32図) 本住居跡からは約100点の遺物が出土している。遺物は土師器を主体とし、須恵器は少ない。遺物は土器破片であり、接合できないものが大半を占める。カマドの付近と推定される住居跡北部の粘土層から、高台付椀形土器が2点出土している。

表-11 1-10A出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法 量	形態等	調査手法	胎土・色調	備 考
32-1	土師 番 高台付椀	口径14.7 底径7.6 器高 6.0 高台高 1.6	口縁部やや外反 高台貼付	ロクロ使用	小石雲母混入 暗褐色	外面スス付着 多少の歪みあり
32-2	土師 番 高台付椀	口径13.4 器高 4.2	口縁部外反 高台貼付	ロクロ使用	外面明褐色 内面黒色、丁寧なミガキ	高台欠損、椀部1/2欠損
32-3	灯明 皿	口径10.7 器高 2.3		ロクロ使用 底部へラ切り	雲母混入	1/3欠損



第32図 1-10A出土遺物(1:3)

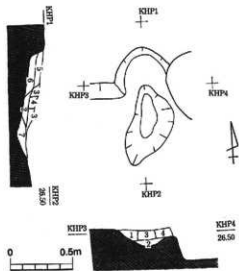
(2) 1-10B住居跡と出土遺物(第31図)

住居跡の北部約1/4を調査した。住居跡の北西部は捜乱を受け、住居跡の北部は円形の土坑によってカマドの一部が破壊されている。住居跡の東部及び南部は調査区域外である。

形 状 東西が3.0m、南北が0.85mまで測る。深さ10cmを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。床はカマドの周辺は比較的良く踏み固められており良好な保存状態であるが、その他は軟弱な状態である。壁は北部の一部が確認されたのみであり、直立する。壁周溝や柱穴は検出されていない。

カマド(第33図) カマドは住居跡北壁を穿って構築されている。カマドの東部は円形土坑による捜乱を受けている。カマドの幅約60cm、長さ約95cm、北壁の掘り込み約30cmを測る。燃焼部の掘り込みはほとんど見られず、燃焼部から緩やかな傾斜を持って煙導部へと移行する。燃焼部からは比較的良く焼けた焼土や炭化物が観察された。カマドの土層から粘土はほとんど観察されていない。

出土遺物 出土遺物は土師器破片が主であり、出土量も少なく図示できる遺物は発見されていない。



第33図 1-10Bカマド(1:30)

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土 焼土粒、炭化物を含む
3. 褐色土 焼土粒、炭化物を含む
4. 明褐色土
5. 褐色土 焼土粒を含む
6. 褐色土 焼土粒多く、粘土を含む
7. 暗褐色土 焼土粒少量含む
8. 暗茶褐色土 焼土ブロック

II 井戸と出土遺物

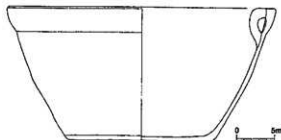
井戸は3ヶ所で検出されたが、いずれの井戸も調査区と接している。地下水の水位が高く（地表下約1mで出水する）、また調査区境界と接しているために覆土が崩落する危険を考慮して、2基の井戸は底部まで達することができなかった。

1. 1-6号井戸と出土遺物

井戸の南部約2/3が調査区外となっている。覆土が崩壊する危険を考慮し井戸底まで掘り下げなかった。調査できた規模は東西1.60m、南北が0.50m、深さ1.10mまで測る。形状はロート形を呈し、平面形はゆがんだ円形である。遺物は出土していない。

2. 2-14号井戸と出土遺物

井戸の北部約1/3が調査区域外となっている。規模の大きな井戸の南壁を切って、規模の小さな井戸が掘られている。規模の大きな井戸を2-14A号井戸、小さな規模の井戸を2-14B号井戸と呼称する。



第34図 2-14A出土遺物(1:5)

(1) 2-14A号井戸と出土遺物

形状(第35図) 東西2.44m、南北が1.52m

まで測り、深さ1.95mである。井戸の南壁を2-14B号井戸が掘り抜いている。形状はロート形を呈する。地下水の水位が高く出水が多く、完全な井戸底には達していない。遺物は井戸底近くからホウロクが出土しているほか、数個の御影石が投げ込まれた状態で出土している。

出土遺物(第34図) ホウロクは口径35.5cm、器高17.7cmを測る。内耳は1個1対である。器内面は明褐色を呈し、外面は黒色のススが多量に付着している。胎土に雲母を多く混入している。焼成は良好である。

(2) 2-14B号井戸と出土遺物(第35図)

2-14A井戸の南壁を切って掘り込んだ井戸であり、径0.78mを測る規模の小さなフラスコ形を呈する。井戸の覆土は黒色土に粘土ブロック、ロームブロックを多量に混入する。明らかに2-14A井戸の覆土(暗褐色土)を切っている。覆土の状態から新しい時代に造られた井戸であろう。

3. 2-15号井戸

2-14号井戸の南に位置し、井戸の南部約1/2は調査区外である。規模は東西1m、南北が0.5m、深さが1mまで測り、フラスコ形を呈する。覆土が崩落する危険性と出水のために、井戸底までは達することができなかった。遺物は出土していない。

III 土坑と出土遺物

土坑は調査区1区の東部と2区の西部に集中し、14ヶ所で検出されている。土坑の時期等を推定する遺物等は発見されておらず、土坑の性格等を推測することは困難である。特記すべき幾つかの土坑について記載する。土坑の規模や形状は表-12の通りである。図示できる遺物はない。

1. 2-12号土坑(第35図)

東西94cm、南北100cm、深さ54cmを測る円形土坑である。土坑の底部はロームと粘土を使用して、25cm

ほどの厚さで固められており、その上に一辺が35~45cmほどの石（筑波山系で見られる御影石）が設置されている。土坑底には28×38cm、深さ10cmの小ビットが掘られている。

2. 2-24号土坑（第35図）

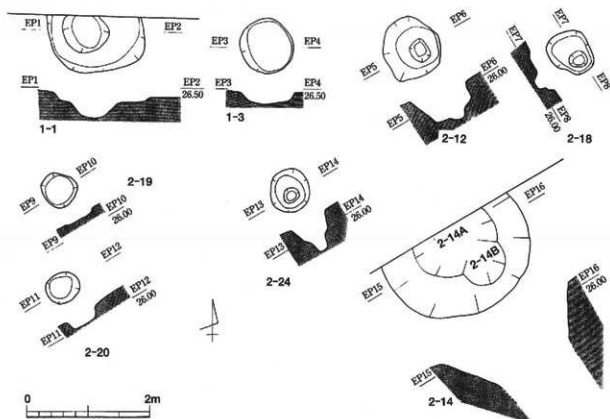
東西64cm、南北70cm、深さ58cmを測る円形土坑である。土坑の底部はやや堅く打ち固められ、土坑底の中央部には、径26×24cm、深さ22cmの小さなビットが穿ってある。

以上の土坑は、高床式建物の柱穴であると推察される。2-12号土坑から発見された御影石は明らかに建物の基礎石である。上記2ヶ所の土坑以外にも、1-10号住居跡のP3、P4等は、土坑の規模などから推察して、高床式建物の柱穴である可能性が高いと思われる。

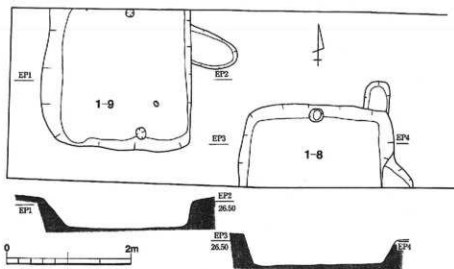
表-12 土坑一覧表

(単位=cm)

No.	規模	形状	備考	No.	規模	形状	備考
1-1	154×98,-44	円形, 丸底	小ビット(74×50, 28)	2-13	88×88,-32	方形	
1-3	90×90,-23	円形, 平底		2-18	66×78,-20	円形	
1-8	250×130,-51	方形	南部調査区外	2-19	56×58,-5	円形	
1-9	241×228,-51	方形	北部調査区外	2-20	58×50,-16	円形	
1-10 P3	112×92,-107	円形	井戸? 掘立て柱?	2-24	64×70,-58	円形	小ビット(26×24,-22)
1-10 P4	62×64,-37	円形	掘立て柱?	2-27	92×82,-13	円形	西北部調査区外
2-12	94×100,-54	円形	石, 小ビット(28×38,-10)	2-28	108×54,-22	円形	西部調査区外



第35図 2-14号井戸, 1-1, 3, 2-12, 18~20, 24号土坑 (1:60)



第36図 1-8, 9号土坑 (1:60)

3. 1-8, 9号土坑 (第36図)

2ヶ所の土坑は、極めて類似した土坑である。規模も大きく、一辺が約250cmを測る、方形の土坑である。土坑底は、多少の凹凸はあるが、概して平坦である。土坑の覆土は、ロームブロックを主体としている。2ヶ所の土坑は、掘り下げた後に素早く埋め戻されたような状態であった。

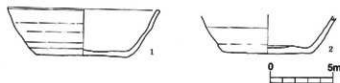
IV 溝と出土遺物

今回の調査で溝は2ヶ所で検出された。1-6溝は幅50~75cm、深さ25cmを測り、形状は緩やかな「U」字形を呈する。1-7溝は幅235~310cm、深さ10~15cmを測り、小さな窪地状の形状を呈する。

V その他の遺物 (第37図)

第37図1は表土の中から発見された、須恵器環形土器である。口径11.9cm、3.9cmを測る。器内外面ともに、ヘラ状工具を用いて成形されている。ロクロを使用し、底部はヘラ切り離しである。口縁部外面は黒褐色、内面は暗灰褐色を呈する。胎土に雲母を含む。内面にススが附着した黒色斑点が3ヶ所で観察される。灯明皿に転用されていたものであろうか。

第37図2は表土から発見された、須恵器環形土器である。口縁部が全損し、胴部は1/3が欠損している。外面の底部近くはヘラ削り、底部はヘラ切り離しである。胎土に雲母を含む。焼成はやや不良である。



第37図 その他の遺物 (1:3)

坪内遺跡

第八章 坪内遺跡の概要

坪内遺跡は茨城県真壁郡明野町大字宮山172番地外に所在する。

坪内遺跡は、明野町の東部を南北に延びる丘陵（標高36～68m）から一段低くなった微高地（標高約26～27m）の基部に営まれている。微高地は南に向かって大きく張り出しており、微高地の東は南北に延びる低地から分かれた小さな低地に面し、西は明野町を南北に縦断する大きな低地に面している。坪内遺跡の東方には、低地を挟んで矢尻遺跡と押尾古屋敷遺跡が所在する。遺跡の現況は畑であり、微高地の中央部には西押尾の集落が形成されている。

今回の発掘調査区域は、遺跡が所在する微高地の東斜面に位置し、坪内遺跡の東側縁部に該当する区域である。東斜面は緩やかな傾斜をもって、微高地の東を南北に走る低地に至る。

調査区は、土地改良事業に係わる水路用地であるため、幅2.4mを測る狭長な区域である。微高地の東斜面に「T」字形に調査区が設定された。東斜面に並行して南北に設定した調査区を1区、東斜面に直交して東西に設定した調査区を2区と呼称して調査に着手した。調査区の総延長は195m、総面積は468㎡を測り、調査区1区は全長120m、面積288㎡、調査区2区は全長75m、面積180㎡である。調査区の現況は畑である。遺跡の基本的な土層は、20～25cmの耕作土、ローム層、黄褐色粘土層、そして青白色粘土層へと移行している。耕作土層の下層は直接にローム層へと移行しており、耕作土層とローム層は明瞭に分離される。粘土層は比較的多くの砂を含んでいる。

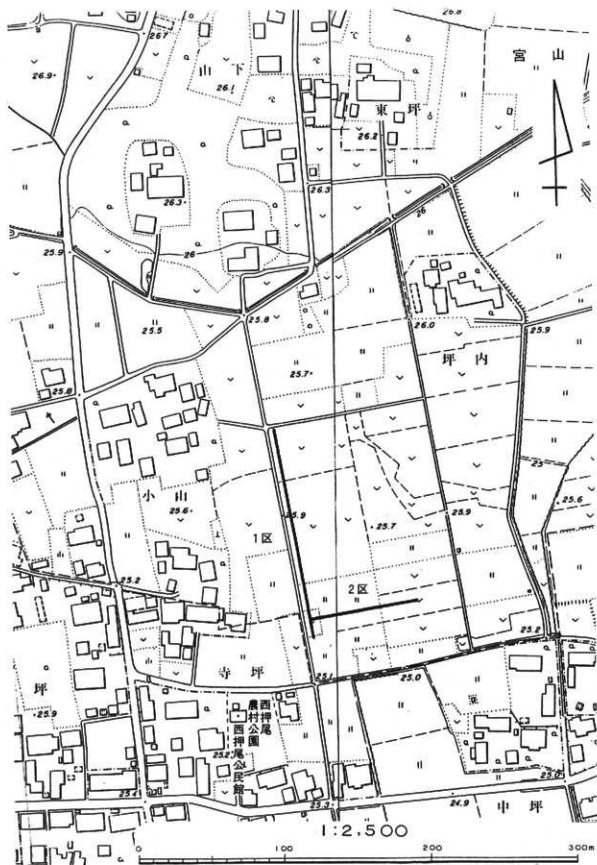
調査区1区からは住居跡5ヶ所、土坑14ヶ所、井戸1ヶ所、溝4ヶ所が検出されている。住居跡は調査区の北側に多く見られる。調査区域が狭長であるために、住居跡の全容を把握することは不可能であるが、住居跡の検出状況等から、平面形が方形を呈しカマドを有するものと推定される。いずれの住居跡も掘り込みが浅く、ローム層から10cm弱で床に達する。井戸は調査区のほぼ中央部から検出され、ロート形を呈する規模の大きな井戸である。溝は調査区南側から検出されており、1-25号溝と2-29号溝とは同一の溝と思われる。2つの溝は北西方向に掘られている。

出土遺物は、住居跡から奈良・平安時代に位置する土師器を主とし、須恵器の出土量は少ない。土坑や溝からは構築時期や遺構の性格等を推測できる遺物等は出土していない。

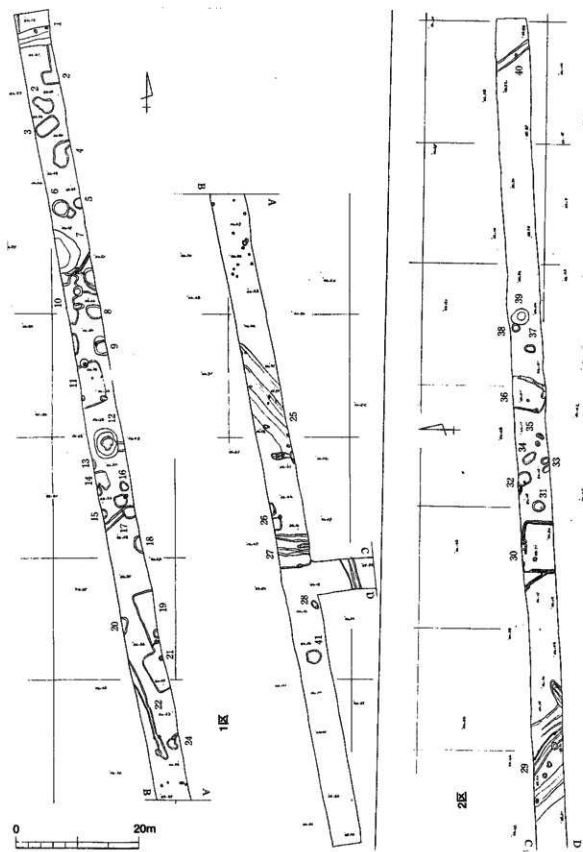
調査区2区からは住居跡2ヶ所、土坑3ヶ所、井戸1ヶ所、溝2ヶ所が検出されている。調査区1区と同様に住居跡は方形を呈するものと推定される。出土遺物は奈良時代から平安時代に比定される土師器が主である。井戸は調査区の東側から検出され、規模が小さくフラスコ形を呈する。溝は2区西側（2-29）と東側（2-40）から検出されている。2-29号溝は数回の重複が観察される。土坑は、2-30号住居跡の東に見られ、円形土坑が多く検出されている。

土坑や溝からは、遺構の構築時期や使用目的等を推測できる遺物等は発見されていない。

遺物の出土量はコンテナ3箱に足りず、相対的に少ない出土量であろう。遺物の多くが、住居跡から発見されたものであり、土坑やその他の遺構から発見されたものは少ない。遺物は土師器破片を多く出土しており、須恵器等は少ない。破片は接合ができないものが多く、図示できる遺物は少ない。器形は高台付椀形土器や瓶形土器等が発見されている。



第38図 坪内遺跡



第39图 坪内遺跡全体图

第九章 遺構と遺物

I 住居跡と出土遺物

1. 1-7号住居跡と出土遺物 (第40図)

調査区の最も北に位置する住居跡である。住居跡の西部は、風倒木痕と推察される大きな攪乱坑により破壊されている。北部は住居跡の覆土が浅く明瞭ではない。住居跡の南東部約1/4を確認した住居跡である。

形状 住居跡南東壁の長さは1.70mを測り、南西部にコーナーが僅かに観察される。住居跡の平面形は方形を呈するものと推定される。住居跡の掘り込みは見られず、ローム層上面が床面として確認された。住居跡の軸は北西方向を示している。床は南東部で堅く踏み固められており、良好な保存状況である。カマドは南西壁に設置されていたと推定され、風倒木痕の覆土中に粘土が多く観察される。壁周溝は幅20~25cm、深さ10~12cmで、南東壁に沿って検出されている。柱穴は検出されていない。

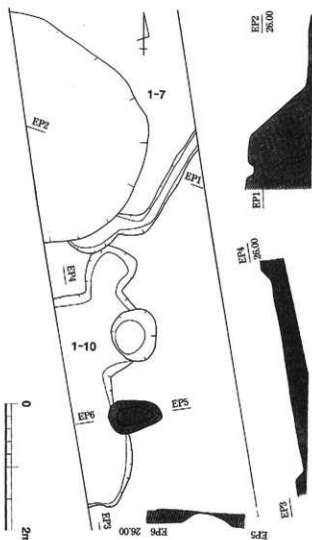
出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が発見されているが、出土量も少なく図示できる遺物は発見されていない。

2. 1-10号住居跡と出土遺物 (第40図)

1-7号住居跡の南に位置し、住居跡の東部約1/4を調査した。住居跡の北東コーナー部は2ヶ所の土坑により攪乱を受けている。

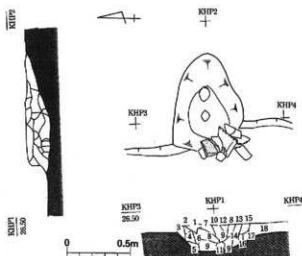
形状 東西が0.84mまで測り、南北3.40m、深さ7cmを測る。平面形は方形を呈する住居跡である。床はローム層を直接使用しているが、やや軟弱であり保存状況は良好とは言えない。壁周溝や柱穴は検出されていない。

カマド (第41図) カマドは東壁を穿って構築されており、その規模は全長87cm、幅57cmを測り、燃焼部は42×33cm、深さ4cmの規模で楕円形に落ち込んでいる。東壁を70cmほど掘り込み、燃焼部から煙導部へと緩やかに立ち上がっている。燃焼部には焼土や炭化物の堆積が顕著に観察され、カマドの保存状態は良好である。カマドは粘土を主材料として使用し、右袖部には銚釜の破片等を補強材として利用している。燃焼部から粘土製の支脚がややカマド奥側に倒れて出土している。



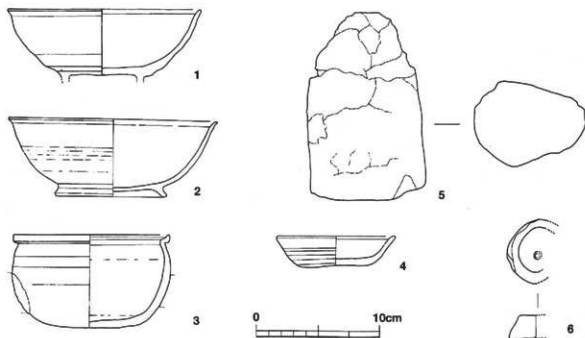
第40図 1-7, 10号住居跡 (1:60)

カマド及びその周辺からは、高台付碗形土器等の遺物が多く出土している。



- 1-10カマド土層説明
- | | | | |
|-----------|----------------|-----------|-------------|
| 1. 褐色土 | 粘土多く含む、粘性しまりあり | 18. 暗褐色土 | 粘土含む |
| 2. 暗褐色土 | | 21. 褐色土 | 粘土多く含む |
| 3. 暗茶褐色土 | 焼土主体 | 22. 褐色土 | 焼土灰含む柔らかい |
| 4. 暗褐色土 | 焼土ブロック多く含む | 23. 暗褐色土 | 焼土灰含む柔らかい |
| 5. 暗褐色土 | 焼土含む | 24. 暗褐色土 | 焼土灰含む柔らかい |
| 6. 暗褐色土 | 焼土生焼けローム含む | 25. 暗褐色土 | 焼土褐色土少量含む |
| 7. 褐色土 | 粘土層 | 26. 暗茶褐色土 | 焼土ブロック多い |
| 8. 茶褐色土 | 焼土 | 27. 褐色土 | 粘土多く含む |
| 9. 暗茶褐色土 | 生焼けローム | 28. 暗茶褐色土 | 焼土多量、柔らかい |
| 10. 暗褐色土 | ローム、焼土粒混りや多く含む | 29. 暗褐色土 | 焼土少量、柔らかい |
| 11. 暗褐色土 | 焼土を少量含む | 30. 暗褐色土 | 焼けたロームブロック |
| 12. 暗褐色土 | 焼土を少量含む | 31. 褐色土 | 生焼けローム混入 |
| 13. 褐色土 | 生焼けローム多く焼土少量 | 32. 暗茶褐色土 | 焼土及び粘土 |
| 14. 暗褐色土 | やや明るいローム焼土含む | 33. 褐色土 | 焼土やや多量、粘土混入 |
| 15. 暗茶褐色土 | 焼土を多量に含む | 34. 暗褐色土 | 焼土ブロック |
| 16. 暗茶褐色土 | 主体とする | | |
| 17. 褐色土 | 主体とする | | |

第41図 1-10カマド (1:30)



第42図 1-10出土遺物 (1:3)

出土遺物(第42図) 今回の調査では最も多くの遺物を出土した住居跡の一つである。約50点の遺物が出土しているが、多くが破片であり接合できない遺物が多数を占める。遺物は土師器が大半を占めており、器形は高台付碗形土器や把手付壺形土器等である。

表-13 1-10出土遺物観察表

(単位=cm)

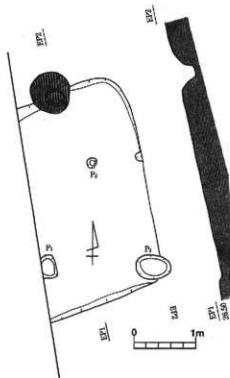
No.	器種	法量	形態等	調査手法	胎土・色調	備考
42-1	高台付碗	口径 15.7 器高 5.4	口縁部外反	外面ハケ、内面ヘラ 底部糸切り	雲母を含む 橙褐色	高台欠損 黒疵あり
42-2	高台付碗	口径 14.1 器高 6.3	口縁部外反	内外面ヘラ	雲母小破片を含む 褐色	内面黒色
42-3	把手付碗	口径 12.6 器高 7.6	口縁部く字形稍曲 把手3ヶ所	底部ヘラ切り	小石多い 橙褐色	把手欠損
42-4	灯明皿	口径 9.7 器高 2.6		底部ヘラ切り	雲母多量を含む 明褐色	1/3欠損
42-5	支脚	直径 6.3 器高 15.2	円錐形		褐色	
42-6	紡錘車	径 5.3 厚み 1.9	孔径 0.6		暗褐色	1/2欠損

3. 1-11号住居跡と出土遺物(第43~45図)

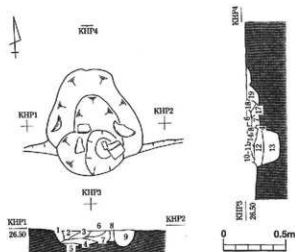
住居跡の東部約1/2を調査した。住居跡南西部は土坑による攪乱を受け、西は調査区外である。

形状(第43図) 東西が1.90mまで、南北3.40mを測る。住居跡の北部で深さ5cmを測り、南東部では掘り込みは見られない。平面形は方形を呈し、軸はやや北西方向にとる住居跡である。床はローム層を利用し、強く踏み固められており保存状況は良好である。ピットは3ヶ所で検出されている。P1は、住居跡覆土中から堀込まれており、P3は住居跡を切っている。P2は規模も小さく、柱穴とは考えにくい。壁周溝は確認されていない。カマドは北壁を穿って構築されている。

カマド(第44図) カマドは北壁を穿って構築されており、その規模は全長85cm、幅72cmを測り、燃烧部は65×40cm、深さ5cmの規模で掘込んでいる。燃烧部の東部には30×35cm、深さ15cmピットが掘られている。北壁の掘込み65cmを測る。燃烧部から煙道部へ緩やかな傾斜を持って立ち上がっている。カマドは粘土を主材料とし、カマド両袖には土師器瓶形土器の破片を用いて補強材としている。燃烧部や煙道部には多量の焼上が観察されており、カマドの保存状況は良好である。



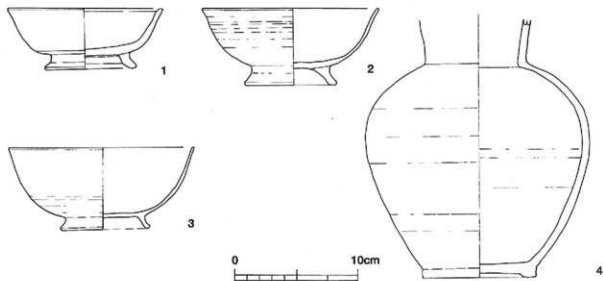
第43図 1-11号住居跡(1:60)



第44図 1-11カマド (1:30)

1-11カマド土層説明

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. 暗褐色土 黒色土ブロック焼土粒含む | 12. 暗褐色土 粘土粒、焼土粒多く含む |
| 2. 暗褐色土 粘土、焼土含む | 13. 暗褐色土 ローム粒焼土粒含む |
| 3. 暗褐色土 焼土を多量に含む | 14. 暗褐色土 焼土少量含む |
| 4. 暗褐色土 黒色土ブロック含む | 17. 褐色土 粘土主体、暗褐色土混入 |
| 5. 明褐色土 炭けたローム | 18. 暗褐色土 焼土少量、黒褐色土ブロック混入 |
| 6. 暗褐色土 焼土、粘土を含む | 19. 暗褐色土 焼土極少量混入 |
| 7. 暗褐色土 焼土主体、粘土含む | |
| 8. 暗褐色土 | |
| 10. 褐色土 焼土多く含む | |
| 11. 暗褐色土 焼土粒粘土粒少量含む | |



第45図 1-11出土遺物 (1:3)

表-14 1-11出土遺物観察表

(単位=cm)

No.	器種	法	量	形態等	調整手法	胎土・色調	備考
45-1	高台付碗	口径12.7	器高3.0	粘土やや厚い	高台貼付	小石多い、褐色	内面黒色、彫形に歪みあり
45-2	高台付碗	口径14.4	器高6.3	口縁やや外反	高台貼付	細かい雲母	内面黒色、1/2欠損
45-3	高台付碗	口径15.1	器高6.8		高台貼付、胴部下平ヘラ削り	褐色~暗褐色	
45-4	陶器壺	胴部径 8.3 胴部径18.2 器高23.5		高さ0.3の高台付			胴部~胴部下平灰釉が流下

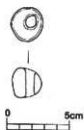
出土遺物 (第45図) 本住居跡からは約25点の遺物が出土し、その多くがカマドの周囲に集中して出土している。出土遺物の多くは小破片であり接合できない遺物が多い。カマドの支脚に使用されていた土師器瓶形土器も底部の破片である。灰釉陶器の長頸壺形土器は、床面の北部から、数カ所に散在した破片として出土している。

4. 1-19号住居跡と出土遺物 (第46図)

住居跡の西側約1/4を調査した。住居跡は南部で1-21号住居跡と重複し、重複した部分には土坑等による擾乱が見られる。1-19号住居跡と1-21号住居跡の新旧関係は不明である。

形状 東西が1.90mまで、南北が5.0mまで測る。住居の掘り込み浅く、約10cm程である。住居跡は軸を僅かに北西方向にとり、平面形は方形を呈する。今回の調査で検出された住居跡の中では最も規模の大きい住居跡である。床はローム層を直接使用しているが、やや軟弱である。ピットは2ヶ所で検出されているが、柱穴とは考えにくい。壁周溝やカマド等は検出されなかった。

出土遺物 (第47図) 住居跡東部の調査区との境界から土玉が1個出土している。土玉は径2.6cm、高さ2.4cmを測り、径0.7cmの孔が貫通している。胎土、焼成ともに良好である。色調は暗褐色を呈する。

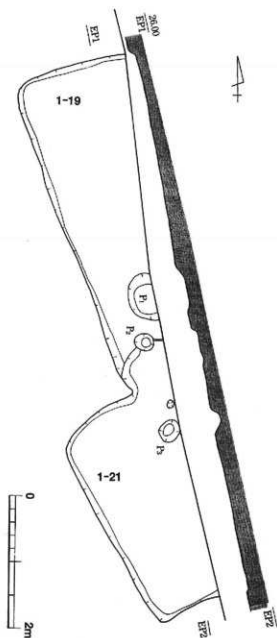


第47図 1-19出土遺物 (1:3)

5. 1-21号住居跡と出土遺物 (第46図)

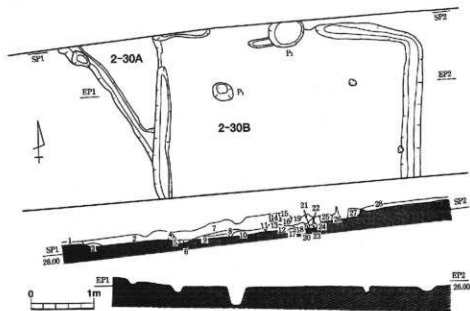
住居跡の西側約1/3を調査した。住居跡は東部は調査区外である。

形状 東西が1.78mまで測り、南北3.24mの規模である。深さは約10cmを測り、軸を北西方向にとり、平面形は方形を呈する。住居跡の掘込みは少なく、床を検出して確認した住居跡である。床はローム層を直接利用しているが、やや軟弱であり保存状況は不良である。壁は直立するものと推察される。壁周溝や柱穴及びカマド等は検出されていない。



第46図 1-19, 21号住居跡 (1:60)

出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が出土しているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。



2-30上層説明

- | | | | |
|---------------------|----------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 暗褐色土 | 2. 暗褐色土 焼土小ブロック少量含む | 10. 暗褐色土 鈳いローム少量含む | 19. 暗褐色土 粘土主体焼土やや多い |
| 3. 暗褐色土 鈳いローム混入 | 4. 暗褐色土 ローム小ブロック含む | 11. 暗褐色土 粘土少量含む | 20. 黒褐色土 カクラン |
| 5. 暗褐色土 焼土鈳いローム含む | 6. 暗褐色土 ローム少量含む | 12. 灰褐色土 粘土, カマド西袖か | 21. 灰褐色土 粘土 |
| 7. 暗褐色土 焼土やや多ローム粒少量 | 8. 褐色土 焼土や多ローム粒少量 | 13. 暗褐色土 粘土主体, 褐色土混入 | 22. 暗褐色土 粘性鈳いローム |
| 9. 褐色土 住居跡床面か | 10. 暗褐色土 焼土や多ローム粒少量 | 14. 暗褐色土 焼土小ブロック含む | 23. 暗褐色土 焼土含む |
| | 11. 暗褐色土 鈳いローム少量含む | 15. 暗褐色土 焼土多く含む | 24. 暗褐色土 鈳いローム主体とする |
| | 12. 灰褐色土 粘土, カマド西袖か | 16. 暗褐色土 焼土, 粘土やや多い | 25. 暗褐色土 鈳いローム主体とする |
| | 13. 暗褐色土 粘土主体, 褐色土混入 | 17. 黒褐色土 | 26. 明褐色土 |
| | 14. 暗褐色土 焼土小ブロック含む | 18. 暗褐色土 粘土主体焼土含む | 27. 褐色土 ロームと暗褐色土混入 |

第48図 2-30号住居跡 (1:60)

6. 2-30号住居跡と出土遺物

2ヶ所の重複する住居跡を調査した。2-30Aと2-30B号住居跡である。2-30A号住居跡は北西部の一部を調査したものである。2-30B号住居跡は、北部約2/3を調査した。住居跡の南と北は調査区域外となっている。住居跡の新旧関係は、土層等の観察から2-30A号住居跡が、2-30B号住居跡に切られている。

(1) 2-30A号住居跡と出土遺物 (第48図)

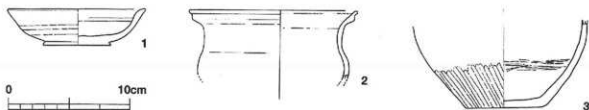
形状 東西が1.20m, 南北が2.0mまで測る。深さ約10cmを測り、平面形は方形を呈すると推定される。床はやや柔らかく良好な保存状況とは言えない。壁は直立し、北西方向に向いている。壁周溝は南西壁に沿って、幅20cm, 深さ5cmの規模で確認されている。柱穴やカマドは検出されなかった。
出土遺物 本住居跡からは土師器の小破片が出土しているが、出土量も少なく図示できる遺物は出土していない。

(2) 2-30B号住居跡と出土遺物 (第48図)

形状 東西4.32m, 南北が2.60mまで測る。20cmの深さで掘込まれている。床は比較的良好に踏み固められており、保存状態はやや良である。ピットは2ヶ所で検出されている。P1は径32×30cm,

深さ25cm、P 2 は径56×40、深さ30cmを測る。ピットの規模や検出位置等から本住居跡に伴う柱穴であると推定される。壁周溝は幅20~30cm、深さ4cmの規模で、住居跡西壁と東壁に沿って検出されている。壁周溝は住居跡を全周するものと推定される。壁は直立する。住居跡北部に粘土の堆積が見られ、調査区北側境界の土層からは、焼土や粘土の堆積が観察されている。住居跡に伴うカマドは北壁に構築されていると推定される。

出土遺物（第49図） 遺物は土師器破片が多く見られ、約45点が出土している。遺物は破片が多く、接合した結果図示できる遺物は下図の3点にすぎない。図示した遺物は住居跡東壁に沿うように出土している。住居跡北部のカマドと推定される粘土層の周囲からは出土していない。



第49図 2-30出土遺物（1：3）

表-15 2-30出土遺物観察表

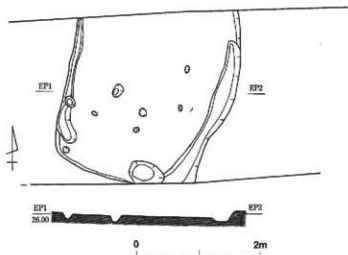
(単位=cm)

No.	器種	法量	形態等	調査手法	胎土・色調	備考
49-1	灯明 甌	口 径11.3 器 高 3.0	底部切り敷し跡のこる	ロクロ使用 底部へう切り	炭母多量に含む 橙褐色	1/4欠損
49-2	土師器 甌	口 径13.7 器 高 5.5(現存)	S字状の口縁		小石多い 橙褐色	口縁部1/2欠損 胴部下半欠損
49-3	土師器 甌(底部)	胴部径14.2 器 高 6.8(現存)		胴部下平へラミガキ 底部へラミガキ		胴部上半欠損

7. 2-36号住居跡と出土遺物（第50図）

住居跡は今回の調査では最も東に位置して検出されている。住居跡の東部は調査区域外となっている。南東部コーナーには円形土坑状の擾乱が見られる。

形状 東西1.70m、南北が2.80mまで測る。深さ10cmの規模で平面形は長方形を呈するが、ややゆがんでいる。ピットは数カ所で確認されているが、いずれも深さ10cm足らずの小規模なピットであり、柱穴と判断することは困難である。壁周溝は東と西壁に沿って検出されている。東壁に沿った壁周溝は幅25~30cm、深さ3cmを測る、やや幅が広く周溝底が平坦な溝である。西壁に沿った壁周溝は幅12~20



第50図 2-36号住居跡（1：70）

cm、深さ7cmを測り、溝の南部で幅広になっている。カマド等は確認されていない。

出土遺物 土師器の破片が出土しているが、接合ができない遺物が多く、また遺物の出土量も少なく、図示できる遺物は出土していない。

II 井戸と出土遺物

調査区1区及び2区から各1ヶ所、2ヶ所の井戸が検出されている。

1. 1-12号井戸 (第51図)

調査区1区の中央部に位置し、調査区の中で最も標高が高い場所に所在する。井戸は東西1.86m、南北2.46m、深さ2.45mを測り、今回の発掘調査では最も規模の大きな井戸である。形状はロート形を呈し、井戸底部はオーバーハングしている。井戸の北西部に現在まで使用されていた農業用井戸があり、この井戸の影響を受けて、本井戸の覆土は一部で空洞化しており、さらに井戸の底部ではオーバーハングして農業用井戸に連続している。農業用井戸が汲み上げる地下水と共に、砂を多く含んだ粘土層も汲み上げていたためであろう。遺物は出土していない。

2. 2-39号井戸 (第51図)

調査区2区の東部に位置する。東西1.32m、南北1.33m、深さ1.74mを測り、フラスコ形を呈する。本井戸は粘土層上面まで掘り抜いた、比較的小規模の井戸である。今回の調査では水が湧いてこなかった唯一の井戸である。遺物は出土していない。

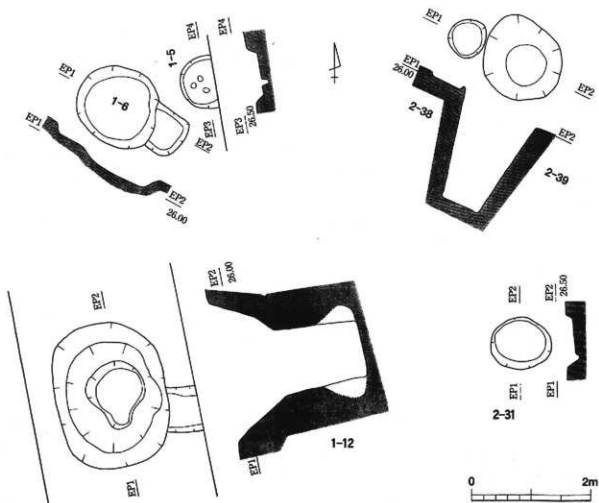
III 土坑と出土遺物 (第52図)

今回の調査で28ヶ所の土坑が検出されている。土坑の規模や形状は表-16のとおりである。土坑は方形を呈するものと、円形を呈する土坑とが観察される。方形を呈する土坑と、円形を呈するが浅い土坑は、覆土が耕作土に類似している土坑が多く見られる。円形土坑で深く掘り込まれた土坑は、覆土に暗褐色土を含み、自然の堆積を示している。土坑の構築時期や性格を推定できる遺物は出土しておらず、土坑の性格等は不明である。

表-16 土坑一覧表

(単位=cm)

No.	径	深	形状	備考	No.4	径	深	形状	備考
1-2	140×114	25	方形	1-1溝重複、東調査区外	1-18	60×146	30	円形	東調査区外
1-3	204×116	16	方形		1-20	50×140	7	方形?	西調査区外
1-4	172×132	12	円形	円形方形土坑重複	1-41	128×114	19	円形	
1-5	62×90	20	円形	東調査区外部51図	2-31	92×104	13	円形	第51図
1-6	134×150	36	円形	方形土坑に切られる	2-32	116×106	9	円形	
1-8	118×118	14	楕円形	東調査区外	2-33	36×68	31	円形	南調査区外
1-9	104×148	38	円形	東調査区外	2-34	66×128	18	楕円形	
1-13	24×56	35	円形	西調査区外	2-35	40×46	38	円形	
1-14	40×80	43	方形	方形土坑重複西調査区外	2-37	62×92	8	円形	
1-15	40×84	9	円形	西調査区外	2-38	67×64	7	円形	第51図
1-16	68×66	11	円形						



第51圖 1-12, 2-39井戸, 1-5, 6, 2-31, 38土坑 (1:60)

1-25 土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む、やや明るい
3. 暗褐色土 鈍いロームブロックを含む
4. 暗褐色土 ローム粒を極少量含む
5. 黒褐色土 粘土粒を含み極めて固い
6. 暗褐色土 ローム粒と少量の赤色スコリア含む
7. 暗褐色土 粘性の強いロームと少量の砂含む
8. 明褐色土 粘性のあるロームと少量の砂含む
9. 暗褐色土 黒色の固いブロック多量に含む
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土 粘性の強いロームと少量の砂含む
12. 褐色土 ロームをやや多く、砂を混入
13. 暗褐色土
14. 褐色土 ロームを多く含む
15. 暗褐色土 ロームを主体とする

IV 溝と出土遺物 (第52~54図)

8ヶ所の溝が検出されている。

1. 1-1号溝 (第53図)

溝は調査区1区の最も北に位置する。幅148~162cm、深さ35cmを測り、東西方向に直線的に延びてゐる。断面形は「U」字形を呈し、溝底は平坦である。溝の東部で他の遺構に切られている。溝を切っている遺構は方形を呈すると推定されるが、遺構の性格等は不明である。

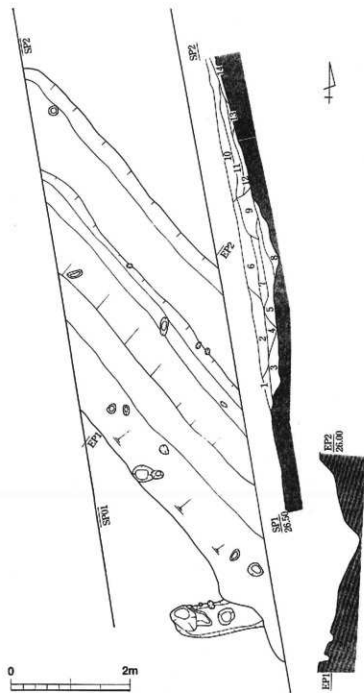
2. 1-25号溝 (第52図)

溝は調査区1区の南部に位置し、調査区を斜めに縦断し、北西

方向に延びる。幅328cm、深さ35~54cmを測り、断面形は「V」字形を呈し、掘り底は平坦である。同様の形状の溝が3ヶ所、重複して掘り込まれている。溝の新旧関係は土層の観察から、中央部の掘り込みが古く、両脇の溝が新しい溝である。覆土には黒色土の非常に固いブロックが混入している。

3. 2-29号溝 (第54図)

溝は調査区2区の西部に位置し、4ヶ所の溝が重複しながら、北西方向に延びている。幅640cm、深さ13~36cmを測り、断面形は立ち上がりが緩やかな「V」字形を呈する。溝底はやや平坦である。

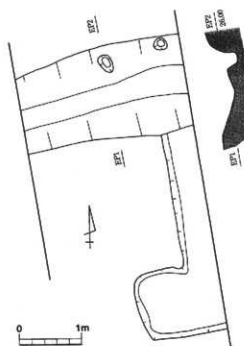


第52図 1-25溝 (1:60)

2-29溝の北西方の延長線上に1-25号溝が所在する。溝の形状や覆土が類似することから、この2ヶ所の溝は連続する溝であると考えられる。

4. その他の溝

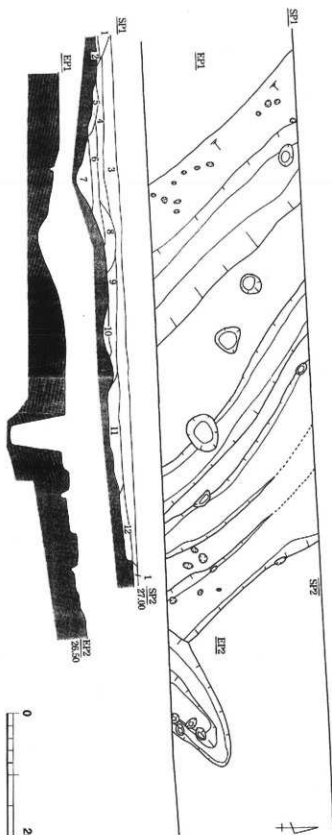
2-40溝は調査区2区の最も東に位置し、幅70cm、深さ25cmを測る「U」字形を呈する。黒色土の覆土が耕作土直下から観察される。他の溝は小規模であり時期等不明である。



第53図 1-1溝 (1:60)

2-29土層説明

1. 暗褐色土 焼土粒ローム粒含む
2. 褐色土 やや茶褐色を帯、ロームを多く含むしまり粘性有り
3. 暗褐色土 ローム粒を極少量含む
4. 暗褐色土 ロームブロックを含む
5. 褐色土 鈍いロームを含む
6. 褐色土 やや茶褐色を帯びるロームブロックを多く含む
7. 褐色土 ロームブロックを多く含むしまりあり
8. 暗褐色土 柔らかい
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土 やや暗く柔らかい
11. 暗褐色土 柔らかい
12. 暗褐色土 柔らかくローム粒を含む



第54図 2-29溝 (1:60)

第十章 まとめ

今回の発掘調査は、観音川流域県営ほ場整備事業区域内の排水路予定地に限定された範囲の発掘調査であるために、遺跡の全容はもとより、遺構の全容を把握することは困難な状況であった。押尾古屋敷遺跡を始めとする3遺跡の発掘調査の成果を、確認調査時の成果を踏まえながら、各遺跡の概要及び特徴を記載してまとめたい。

押尾古屋敷遺跡 発掘調査を実施した調査区1、2区は、微高地の中で最も高い位置にあり、遺跡の中央部付近であると思われる。調査区3区は遺跡の北縁部にあたる位置であろう。確認された10ヶ所の住居跡は、出土遺物等から奈良・平安時代に営まれた集落であろう。確認調査時の成果も踏まえると、集落は調査区1区西部の僅かに高くなった微高地を中心に、西側の低地に沿うように形成されていることが伺える。特記すべきは1-35B号住居跡である。住居跡からは青白色粘土層と轆轤(回転台)に使用したと考えられるピットが検出されている。青白色粘土層は、住居跡南側に厚く北側に薄く堆積していることから、住居跡南側に保管していた粘土が、住居跡の埋没に合わせて住居跡全域に流出したものと考えられる。以上のことから1-35B号住居跡は土器等の工房跡と推察される。工房跡に付随するであろう粘土採掘孔や窯などは確認されていない。

住居跡からの遺物は土器を多く出土し、須恵器は破片を含めても出土量は少ない。図示できる遺物は1-35B号住居跡出土遺物だけであった。土器は高台付碗や三足付碗(甃)、須恵器は坏と高台付碗である。9後半~10世紀に位置づけされる土器の様相を呈している。

堀は1-17号遺構の1ヶ所で検出され、形状は葉研細である。堀は幅約2.5m、深さ約1.1mを測る。堀からは極めて多量のホウロク破片と灯明皿が投棄された状態で出土しており、江戸時代に構築された堀であると推定される。屋敷の周囲に巡らされていた堀であろう。屋敷の主については全く知られていない。地名の「古屋敷」は、本屋敷跡から発祥した地名であることを想像させる。また調査区を南北に横断する溝(1-25、26、37等)は、時期等を推定できる遺物等が発見されておらず、溝の性格等は不明であるが、堀との係わりを有する溝である可能性も残されていると思われる。

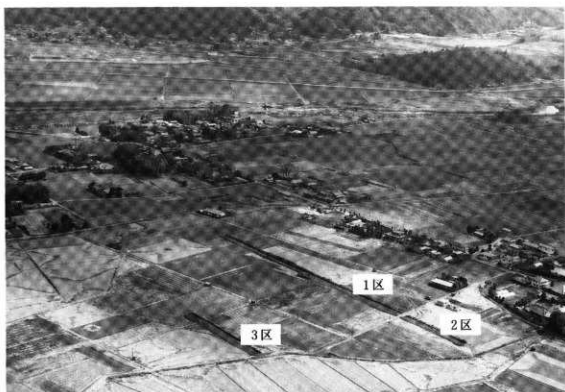
矢尻遺跡 今回の発掘調査では遺構数も少なく、遺跡の内容を把握するまでにはいたらない。検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡や江戸時代の井戸等である。本遺跡の特記すべきは2-12号土坑等に見られる高床式建物の柱穴である。2-12号土坑は、上坑底を多量のロームと少量の粘土を用いて打ち固め、さらに基礎石である御影石を設置している。2-12号土坑と対になる柱穴は検出されておらず、高床式建物の規模等は不明である。2-12号土坑以外にも、1-10P3、1-10P4、2-13号土坑等高床式建物の柱穴と推定される土坑が検出されているが、対となるべき土坑は検出されておらず、建物の規模は不明である。時期を推定できる遺物等は発見されていない。

坪内遺跡 今回は坪内遺跡の東縁部にあたる、緩やかな東斜面を調査したものである。検出された遺構は、住居跡を主体とし、井戸や溝等である。集落跡は微高地の最も高い場所を中心として営まれており、今回の調査は集落の東縁部に相当すると考えられる。住居跡の営まれた時期は、出土遺物等から奈良・平安時代に相当するであろう。坪内遺跡は井戸等の遺構が発見されていること等、奈良・平安時代の集落から江戸時代に至るまで、連続して営まれた遺跡であろう。

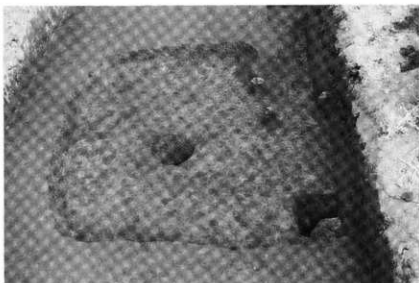
報 告 書 抄 録

ふりがな	おしびふるやしきいせき、やじりいせき、つばうちいせきはつつちようきほうこくしょ							
書名	押尾古屋敷遺跡、矢尻遺跡、坪内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	渡邊久生							
編集機関	明野町埋蔵文化財発掘調査会							
所在地	茨城県真壁郡明野町海老ヶ島2120-7 (明野町教育委員会)							
発行年月日	平成9年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
押尾古屋敷 矢尻 坪内	明野町押尾562番地外			36度	140度	19980129	700m ²	土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
	明野町宮山18番地外			14分	03分	～	328m ²	
	明野町宮山172番地外			58秒	29秒	19980329	468m ²	
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
散布地 集落跡	奈良・平安時代 近・現代	集落、20ヶ所 堀1ヶ所 溝26条 井戸17ヶ所 土坑64ヶ所	土師器、須恵器 内耳ホウロク		集落跡を確認、 屋敷跡に係わるであろう堀を確認 高床式の建物の柱穴を確認			

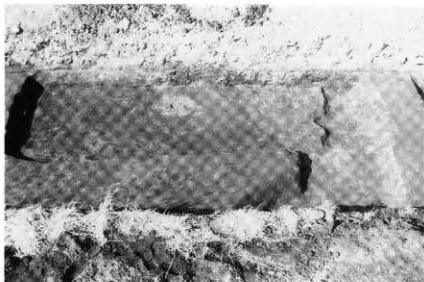
写真図版



押尾古屋敷遺跡 (西から)

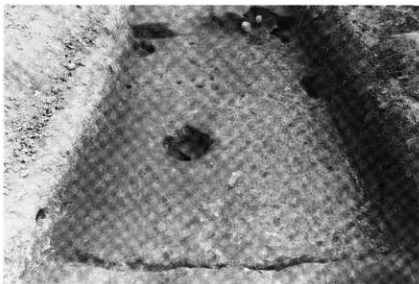


1-1 住居跡 (西から)

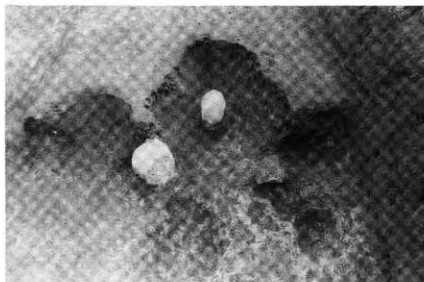


1-27 住居跡 (南から)

1-35A 住居跡 (西から)

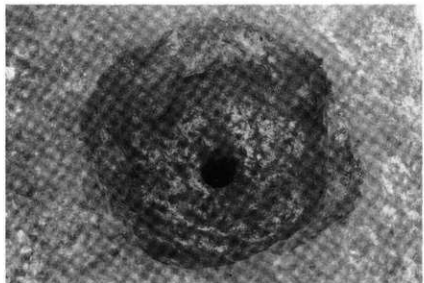
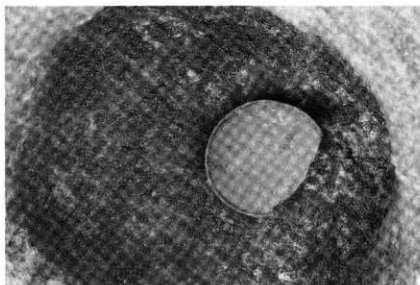


1-35B 住居跡 (西から)

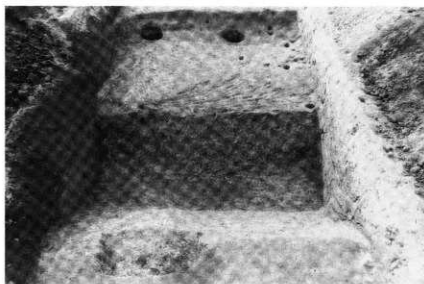


1-35B カマド

1-35BP1 遺物出土状況

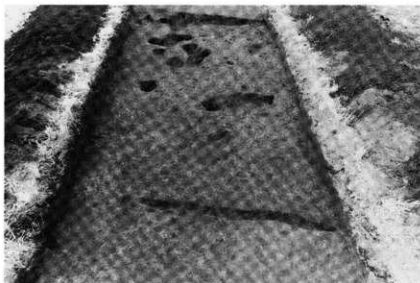
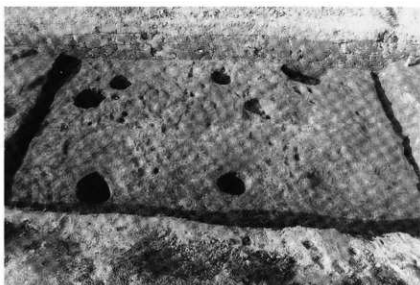


1-35BP1



1-37 住居跡 (東から)

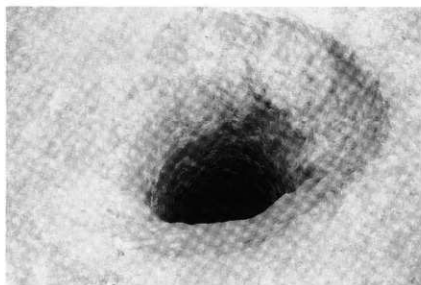
1-38 住居跡 (南から)



2-3 住居跡 (西から)



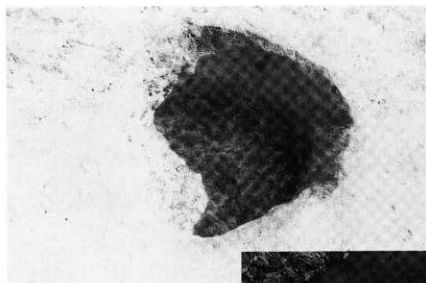
1-12 井戸



1-21 井戸



1-32 土坑



3-1 土坑

3-2 土坑

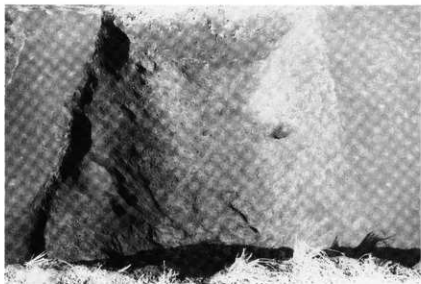


1-17 堀 (東から)

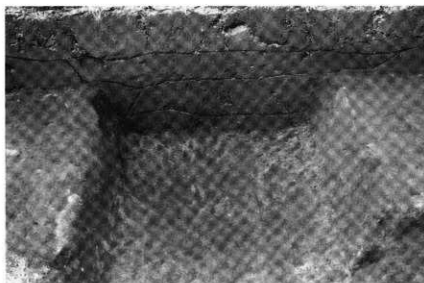


1-17 遺物出土状況
(西から)

1-25 溝 (南から)

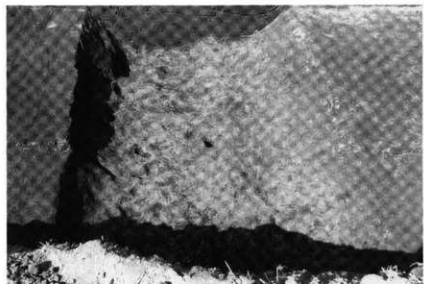
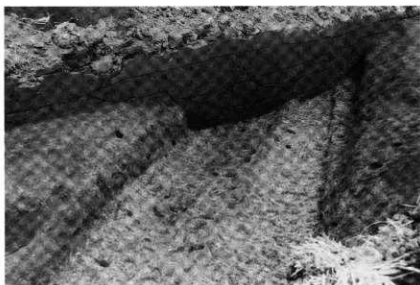


1-26 溝 (南から)



1-28 溝 (南から)

3-3 溝 (南から)



3-6 溝 (南から)



1-35 出土遺物



1-35 出土遺物



1-35 出土遺物



1-35 出土遺物



1-17 出土遺物



1-17 出土遺物



1-17 出土遺物



1-17 出土遺物



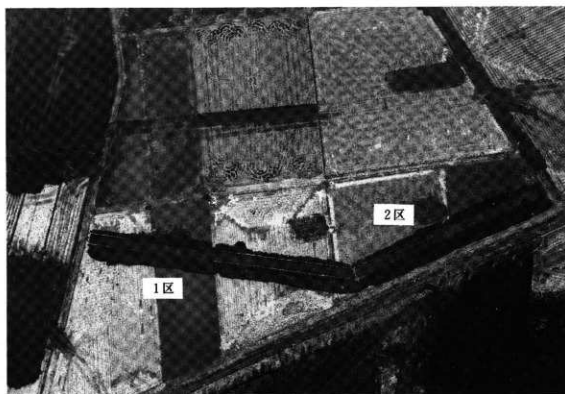
1-17 出土遺物



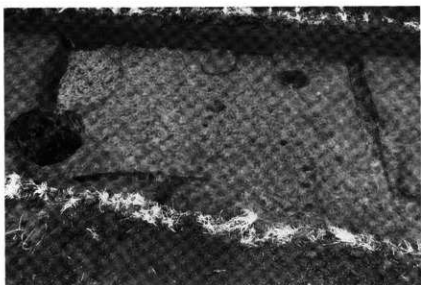
1-17 出土遺物



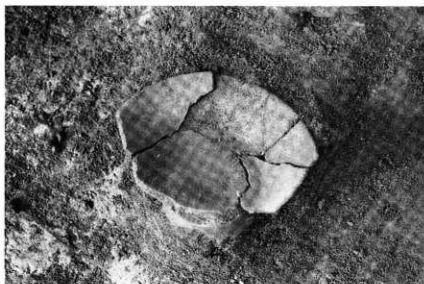
1-17 出土遺物



矢尻遺跡 (北から)



1-10A 住居跡

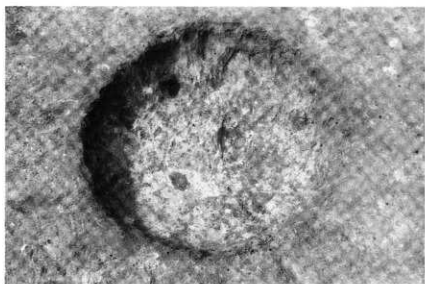


1-10A 遺物出土状況

1-11B 住居跡 (南から)

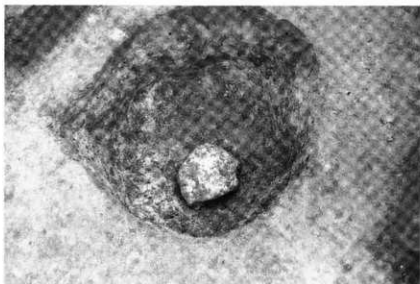


2-14 井戸 (東から)

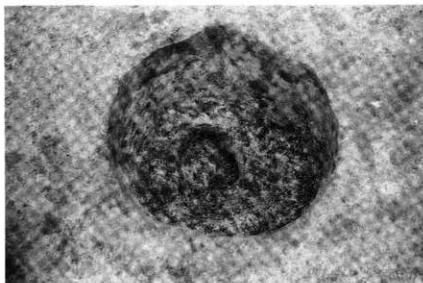


1-3 土坑

1-8, 9 土坑



2-12 土坑



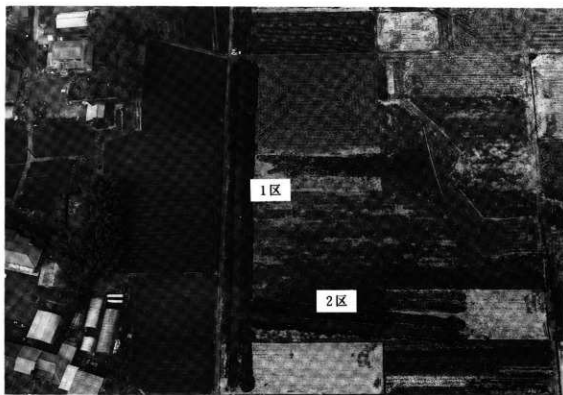
2-24 土坑

1-10 出土遺物

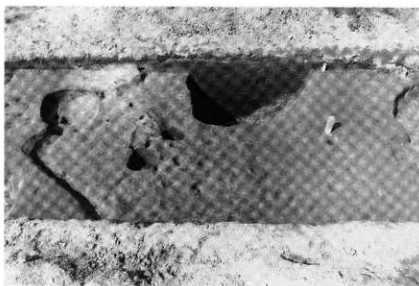


2-14 出土遺物





坪内遺跡 (南から)



1-7 住居跡 (東から)

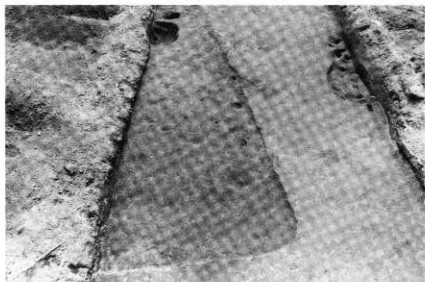


1-10 住居跡 (西から)

1-10 遺物出土状況

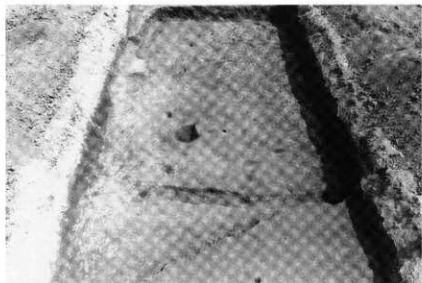
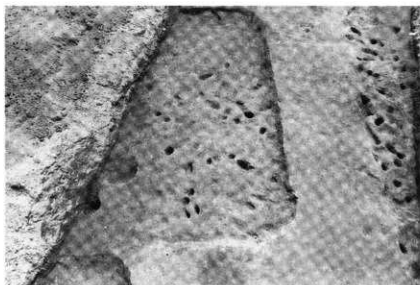


1-11 住居跡 (東から)



1-19 住居跡 (北から)

1-22 住居跡 (北から)

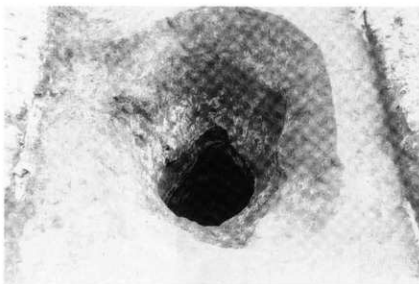
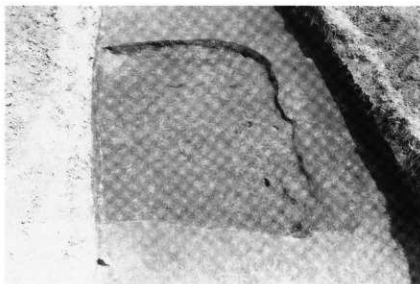


2-30 住居跡 (西から)

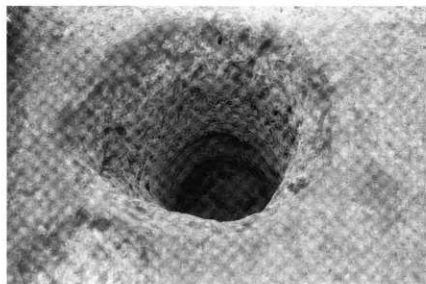


2-30 遺物出土状況

2-36 住居跡 (西から)

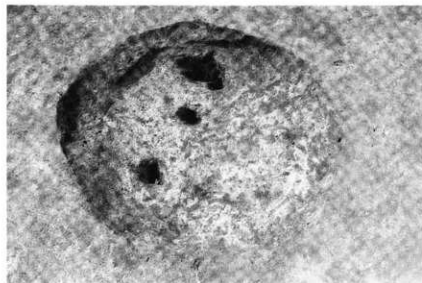
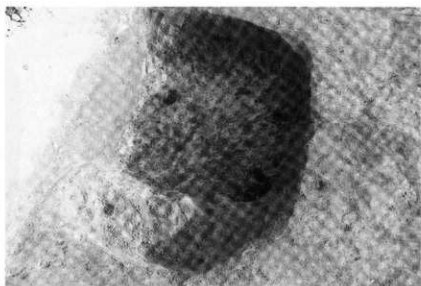


1-12 井戸



2-39 井戸

1-9 土坑



2-31 土坑



1-25 溝



1-10 出土遺物



1-10 出土遺物



1-10 出土遺物



1-11 出土遺物



1-30 出土遺物

押尾古屋敷・矢尻・坪内遺跡発掘調査報告書

平成9年3月10日印刷

平成9年3月25日発行

発行 茨城県真壁郡明野町教育委員会

明野町埋蔵文化財発掘調査会

印刷 タグチ企画

明野町海老ヶ島724

TEL 0296(52)6693